



家庭夜話

園

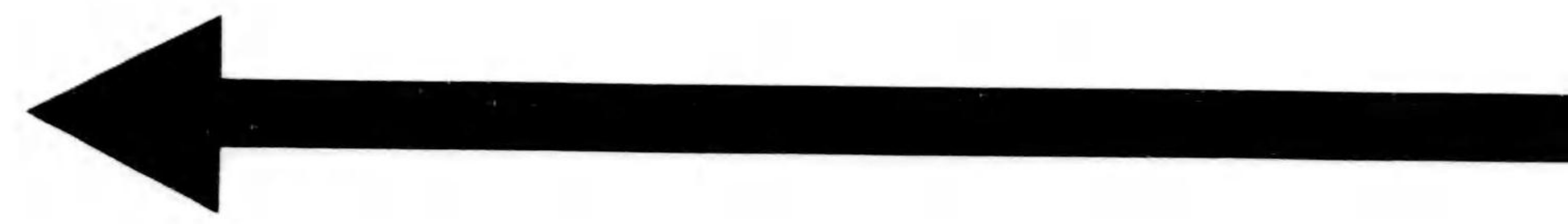
園

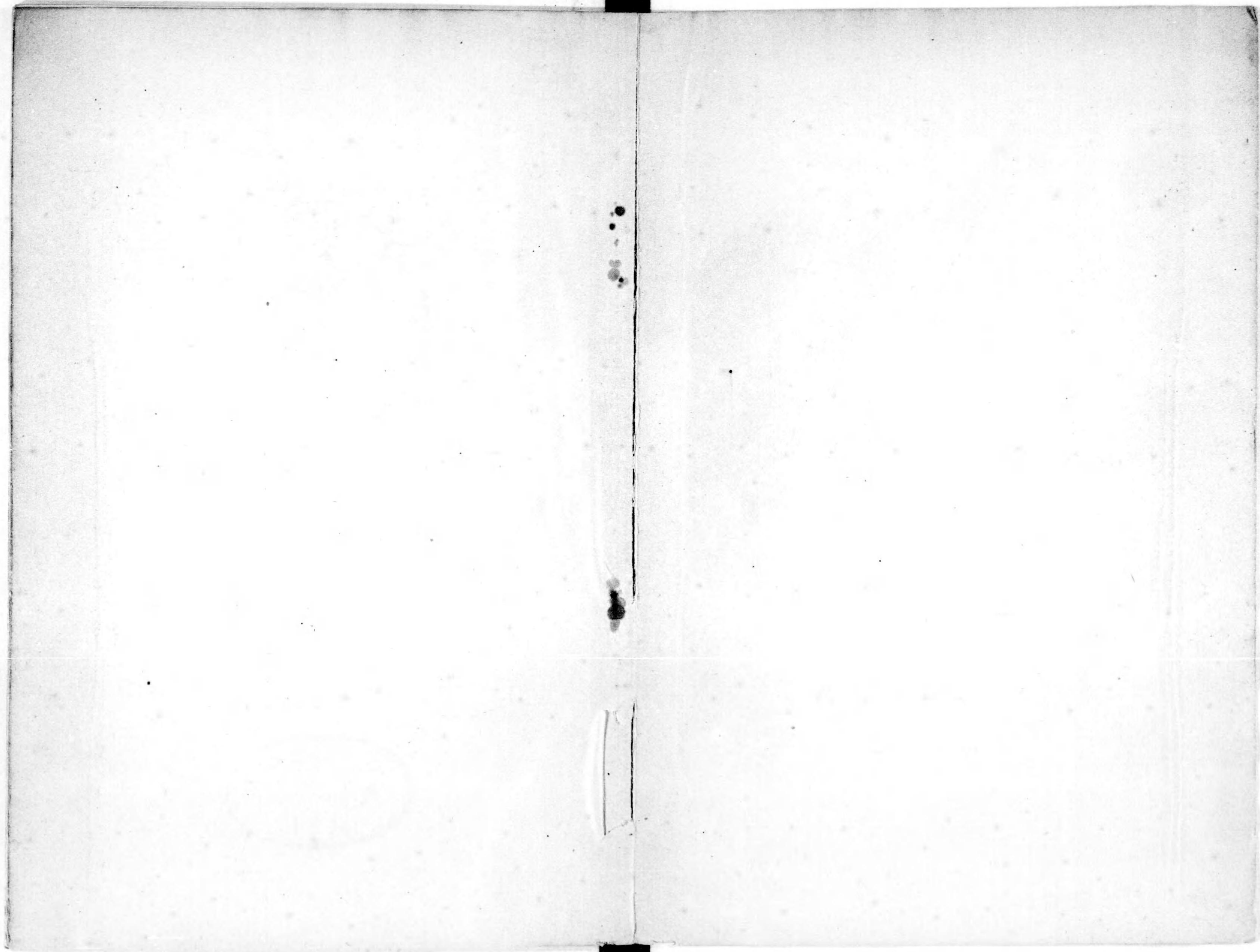
飯塚博士 須藤荘一 著

~~272~~
~~553~~



始



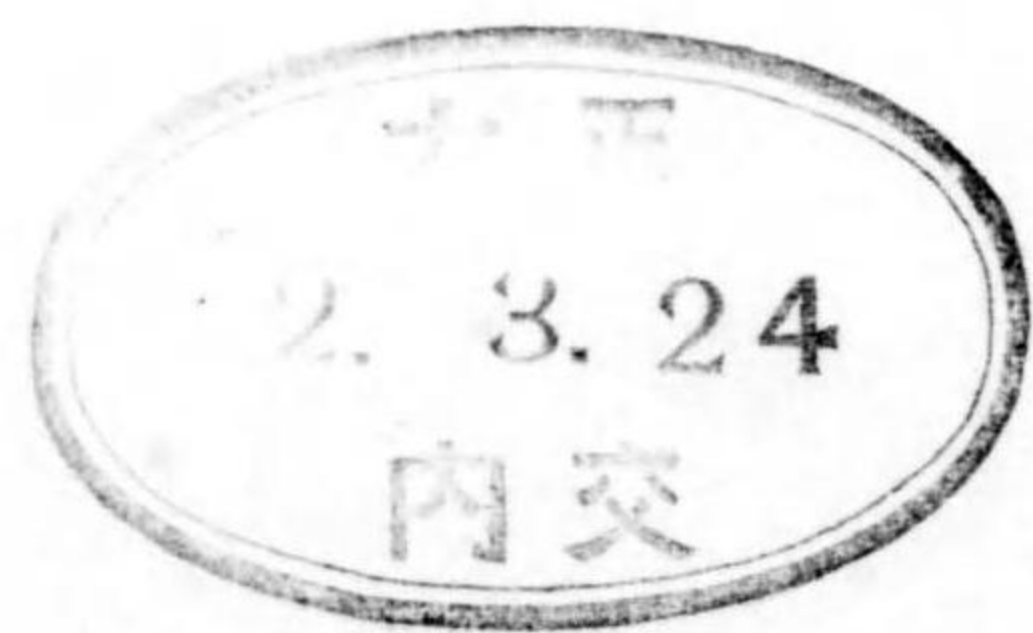


特102
536



物

園

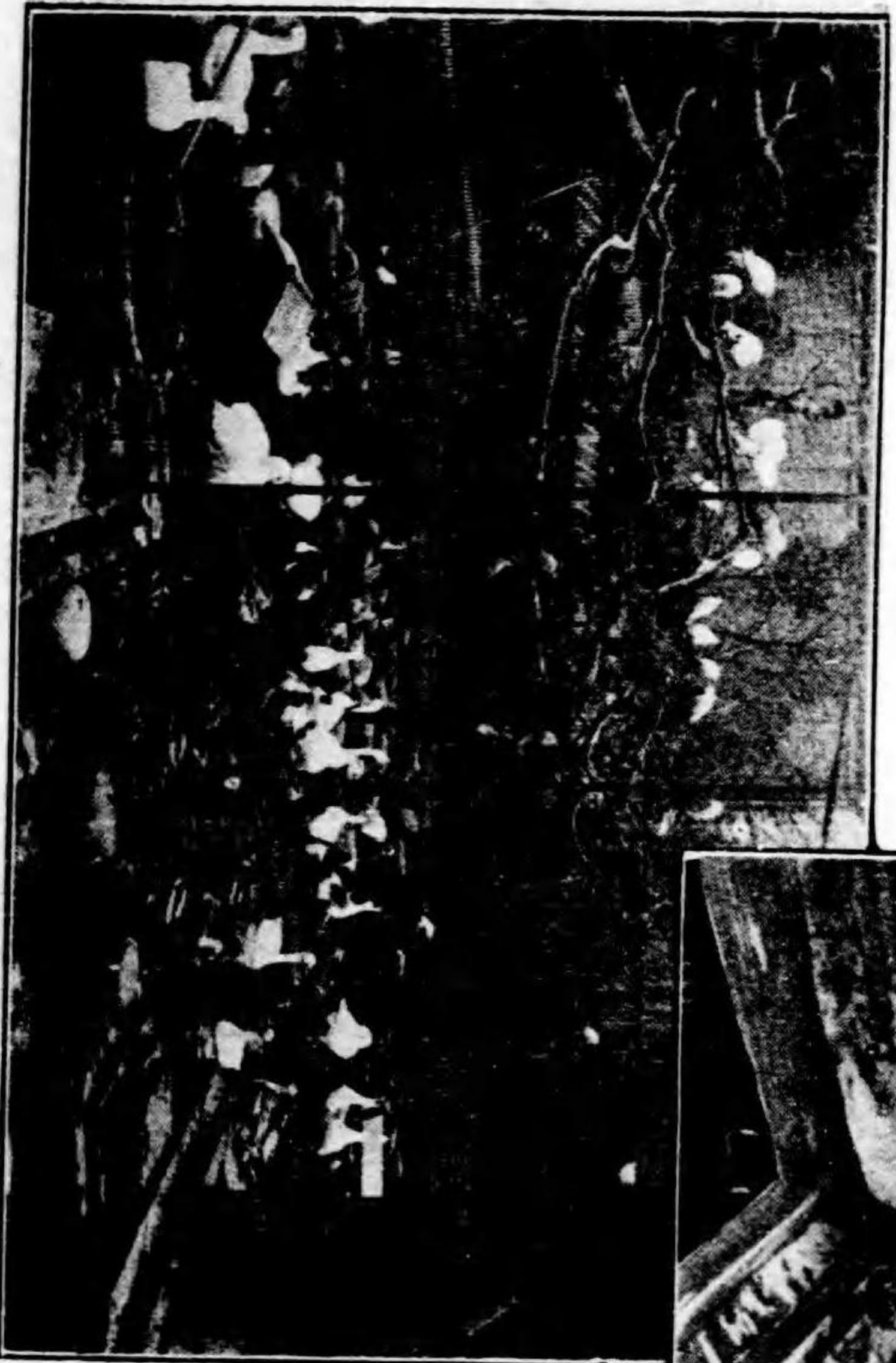


象の羞恥む
 時は非常に
 可愛らしく
 例の大きな
 体を左右に
 揺ぶつて駄
 駄ッ見のや
 うに叫ぶ。



新築された帝室博物館
 附属上野動物園の表門

鳥と云ふても種が多い、
日本だけでも台湾、朝鮮、
樺太などのものを併せる
と十二三種もある……



動物園に居たのを見ると
まるで、大きな甘藷を轉
がしたやうで、ノックリ
とカチ意氣地のない純物だ
が、あれで怒ると小舟でも
嘴が碎きます。

自序

子供だからと馬鹿にしてはなりません。時代が進めば子供の頭も矢張り進みます。これまでは全然空想で作つた謂所お伽噺で満足して居たものも今日はもはやそんなものばかりでは承知しなくなりました。何かもつと新しいもの、ほんとうらしいものをと要求するやうになりました。

此書はつまり此要求に應じようとする新しい試みであります。ですから今までの有りふれた桃太郎や猿蟹合戦などのやうなお伽噺に飽いた大正の少年少女諸君は勿論のこと、子供からお噺を！とねだられる新時代の父兄諸氏にも是非読んで頂き度いのです。それに就けても思ひ出すのは其の昔祖父父母の膝にすがつて昔噺をねだつた私の幼き日の影

であります。茲に此の拙き一巻を故郷の家に老いませる懐しき祖父上
 と、そして私が十一歳の折に世を去り給ひし戀しき祖母上の御靈とに捧
 げ以て當年の腕白小僧が健かに成長して今や却つて子供からお伽噺を
 ねだられる父の身となつた事を報告する紀念としようと思ひます。
 最後に此書を編む初めに當つては懇切なる助言を賜はり、稿の成るに
 及んでは嚴密なる校閲訂正の勞を賜はつた理學博士飯塚啓先生の御好
 情を深く、感謝致します。

大正二年三月六日

東都郊外西大久保の里にて

須藤 莊一 識

家庭動物園目次

人間に最もよく似た動物……………二

尾も無ければ容貌も人間其儘——厭世的な程々、樂天的
 なチンパンジー——智力の一點が人間に劣る

鼻の動物の鼻の話……………一〇

鼻を水鐵砲に代用して納涼——鼻の本職と鼻の道樂仕
 事——陸上動物の中で第一流の游泳上手

生命がけの象狩……………一五

象狩の目的は二通りある——直ぐ足もとに大きな牡象
 の足痕——霧を透すと大象の頭がボンヤリと——象は疾
 風の如く躍進して来た——畜生！逃がすものかと追ひ
 かける——稀れに一本三十貫目位の象牙がある

怒れば小舟でも噛み砕く河馬……………二六

水の底を自由に潜行する河馬—小舟でも噛み砕く大きな口—半身を直立して苦しきうな唸聲—奇抜な埃及の河馬の獵法

陷阱で生捕られる動物園の虎……………三三

骨や生血の一面に散ばつた虎の穴—山羊の子の耳に石を吊して囮とす—猛獸の仔を搔拂つて山羊の乳で育てる

馴らせば蚕も藝をする……………四〇

體の長の二百倍を一飛にする—卵から蛆となり蛹となり蚕となる—車や大砲を引いてあるく蚕の藝當

蟻が菌を作る話……………四五

一時も遊んで暮さぬ蟻—珍妙な葉切蟻の行列—葉を噛み砕いたもので菌畑を作る—百數十問の河底へ隧道を掘る

女王もあれば兵隊もある蜜蜂の社會……………五一

注意深い職蜂の舉動—女王が雄蜂の群と共に新婚飛行—四週間ばかりで立派な職蜂となる—兵糧攻に合ふ哀れな雄蜂—新舊女王の軋轢と巢内の大騒動

珍しい犬のいろく……………五九

泥棒の番をせず其味方をする犬—子守をする犬、泥棒を捜す犬—猫の代理をして鼠を捕る犬—財産や生命の保険に使はれる犬—驚くべき智慧をもつたブードル犬—茸を掘る事の巧い茸犬

動物中で一番大きく開く蛇の口……………七〇

非常に大きく開く顎の構造—蛇の齒は餌を逃がさぬ

爲—兎など蛇に巻れると骨が折れる

恐ろしい大蛇と毒蛇……………七四

野猪や鹿を平氣で丸呑にする—咬み付かれると大概の動物は死ぬ—お釋迦様に日焼をして上げた毒蛇—尻尾の響で敵を近寄せぬガラ—蛇—ハアの爲めに非常な害を被る沖繩人

攻撃の保護色と防禦の保護色……………八五

兩蛙は木の葉の色、水くらげは水の色—獅子は沙漠の色、白熊は雪の色—鍍金の黄蜂と天蘇羅の蝶

油断した爲め退化した鯨の體……………九二

魚類と思はれるのも無理は無い—大洋を大威張で泳ぎ廻つて居る—眼も耳も鼻も皆な利かない

魚類の體の觀察……………九七

日本に居る魚の種類が一千二百餘種—側線は魚類に丈けある器官—身輕に浮いたり沈んだりする器官

奇抜な魚と風變りな魚……………一〇一

木に登る魚喧嘩をする魚—觸鬚で他の魚を近寄せてパクツク魚—仔魚を大事にして育てる魚—深い海の魚は皆な眼が悪い—紅や青や銀の光を發する深海の魚—他の動物に電氣をかける魚—香魚や金魚は外國にも居る

三年目に二千萬疋になる鼠……………一一一

鼠算は縁起が悪いがベストは悪い—毎日學校へ行く前に鼠狩

蝶螈のやうな腹の毒蛙……………一二四

腹を前に出してウンと反る—皮膚からは非常に激し

い毒を出す——鱈魚でさへも恐れて食べない

佛蘭西人の喜んで食べる蛙……………二一九

日本でも赤蛙は薬として食ふ——蛙狩専門の漁夫が居る——數週間に二萬疋の蛙を料理す

蝸牛の料理は珍味中の珍味……………二二三

垣根や庭樹に這つて居るの丈では不足——一年八十萬疋の蝸牛を食べる——雌雄の別なく卵を産む

尾長蛆の生立と蠅蛆の旅行……………二二九

小春日和に飛ぶ優しい花蛇——どう云ふ順序で蛆から蛇に變るか——十分成長すると蠶壺から這ひ出す——何千何萬の蛆がゾヨクと流れ廻る

無遠慮な居候動物……………二三七

丈夫な膜に掩はれた條蟲の卵——人間のお腹だけでは成長し得ない——二週間で寄生主を斃す居候

不精な動物、横着な動物……………二四三

なまけて居るとテラの棒になる——人間ならば殺人強盜の兇賊——真にお恥かしい姿となつた——不精して頭まで無くなつたホヤ——風や潮流を利用して敵を避ける妙案

面白い蟹と恐ろしい蟹……………二五三

蟹の雌雄はどうして見分けるか——奇妙な音を立てる田打蟹——椰子の木に登つて其實を探る蟹

最後尻をヒツて敵を凹ます鼬鼠……………二五六

奇抜なる墨汁や臭氣の武器——頭か頸へ咬み付いて血を吸る——獨りで叶はれば仲間を驅り集めて来る

蜘蛛は動物界の美術家……………一六三

蜘蛛に對して感謝すべき二つの事——蜘蛛の糸に就てのいろいろの研究——雄蜘蛛の體は非常に小さい

公明正大な男らしい熊……………一六八

鱒を漁る熊の早術——牡が仔を喰べる心配から牝は單獨で蟄居——熊の穴狩と追狩はどうしてするか——熊の臟腑に毒が沁み渡るアマツボ狩——アイマの熊の頭崇拜と熊祭

馬鈴薯の好きな野猪……………一七六

豚と野猪とは近い親類——退く事も外れる事も知らぬ野猪——農作物を荒らすので百姓の大敵

世界で一番丈の高い動物……………一八一

十分成長すれば一丈八尺の高さ——猪のやうな短い頸と豹鹿の頸との共通點

傳書鳩を使ふ事が廢れた……………一八六

方向の感覺の非常に鋭い鳥——軍隊の通信に用ひて頗る便利——今日尙ほ實際の用に立てゝ居る所——犬や燕や蜂なども通信用に使はれる

燕は何所から來て雁は何所へ行く……………一九三

霞を慕つて來る燕と花を見棄てゝ去る雁——渡り鳥の徑路に就いての面白い事實——朝鮮から北陸の山を目がけて翔んで來る

舞踏の上手な信天翁……………一九八

何時も鳥の大入大繁昌を占める島——珍妙不可思議な舞踏鳥が廿組

鳥の編物師と鳥の裁縫屋……………101

靴足袋を吊したやうな奇妙な巢——雀などと一緒になつてお喋りする鳥——螢を捕つて来てランプの代用にする——葉を縫ひ合せて巢を作る裁縫鳥

喧嘩する鳥踊る鳥縹緞自慢の鳥……………109

雄同士が出合ふと激しい喧嘩をする鳥——『立派でせう！』と自分の姿を見せる鳥——縹緞自慢の孔雀と盆踊をする鳥——踊つて見せて雌の機嫌を取る南洋の雉子

可愛らしい卵と殻がバケツの代りになる卵……………116

卵にも保護色があるから目につかぬ——無断で他の鳥の巢へ卵を産込む狡猾な鳥——鶏の卵三十個を一つにしたやうな駝鳥の卵——雄は巢にゐて卵を暖める役目

澤山の人を喰殺した獰悪な獅子……………123

人夫に使つて居た土人も四五人食ひ殺された——枯枝を折るやうな骨を噛む音——天幕の中へでも室の内へでも獅子が入込む——身の毛も竦立つやうな獅子の哮へる聲——自らとなつて箱の中に獅子を待つ

動物の睡眠と休息……………135

一寸鼻の先を出し波に體をまかせて眠る臘肭獸——永い冬の間ぶつ續けに休む動物——眠る時にはスツカリ姿をかへる動物——幼蟲の姿、蛹の姿、成蟲の姿で冬を越す蟲——四日でも五日でも情けて休んで居る獸

夜^カ家^カ
話^カ庭^カ
動^カ物^カ
園^カ

理學博士 飯塚 啓閱
寒 泉 須藤 莊一 編

或^ハ日^カ太^カ郎^カと花^カ子^カは叔^カ父^カさん^カに連^カれ^カら^カれ^カて動^カ物^カ園^カを^カ見^カ物^カし^カた。二^カ人^カ
は^ハ大^カ層^カ面^カ白^カが^カつ^カて小^カ半^カ日^カも無^カ我^カ夢^カ中^カで園^カ内^カを^カ驅^カけ廻^カつ^カて居^カた。餘^カ
程^カ氣^カに入^カつ^カたもの^カと見^カえ^カて家^カへ^カ歸^カつ^カて^カか^カら^カも頻^カりに^カ見^カて^カ來^カた動^カ物^カ
に^カ就^カて叔^カ父^カさん^カに質^カ問^カす^カる。叔^カ父^カさん^カは喜^カんで一^カく^カ丁^カ寧^カに^カ答^カへ^カて
や^カり又^カ其^カ後^カも暇^カのある^カ時^カには二^カ人^カを^カ集^カめて面^カ白^カい動^カ物^カの^カ話^カを^カし^カて
聞^カか^カせ^カた。

「何^カが^カ一^カ番^カ面^カ白^カか^カつ^カた？」と動^カ物^カ園^カから^カ歸^カつ^カた時^カ叔^カ父^カさん^カに尋^カね^カら

人間に最もよく似た動

れて

『象と河馬とそれからお猿!』と太郎が云ふと、

『あの親猿におんぶしたり、お乳を呑んだりする小さなお猿の赤ン坊は、ほんとに可愛かつたのねえ。』と花子も口を挿んだ。二人は金網の中で親猿仔猿が遊んで居る有様を再び心に描いて見た。

『けれども、お猿は皆な彼様に可愛らしいもんぢやない、猿の中には随分怖い大きなのも居るんだよ。』と云つて、叔父さんは夫れから大猿の話をした。

人間に最もよく似た動物

尾も無ければ容貌も人間其儘

一口に猿と云つても種類が非常に多く、大きいのも小さいのも、尻尾の長いのも短いのも、又まるで尻尾のないのも、種々様々であるが、其の中で最もよく人間に似て居るのは、亞弗利加の西海岸に近い處の森の中に棲む二種類と、東印度のスマトラ、ボルネオ等の島に棲む一種類と、都合三種類である。

亞弗利加に棲む二種類の一は、ゴリラと云つて身長が六尺以上に達し、世界第一の大猿である。他の一はチンパンジーと云つて、身長はゴリラよりも少し小さくて四五尺位が普通である。次にボルネオ、スマトラ等の島に棲むものは日本へも見世物などになつてよく渡來するオランウータン即ち猩々である。之れも身長は略人間と等しい。

一體に猿は動物の中で一番よく人間に似て居るが、日本などに居る猿は似て居ると云つても、身體も小さいし、又短かいながらも、ちやんと尾が生

人間に最もよく似た動物

へて居る。その上、お臀の處には全然毛の無い、赤色の皮膚の裸出して居る部分がある。斯う云ふ點だけでも、人間とは異つて居るのであるが、前に述べたゴリラ、チンパンジー、猩々の三種になると尾もなければ、お臀の處の裸出した部分もなく、身體の大きさも人間と餘り異はぬ。耳や眼などもよく似て居て容貌も如何にも人間らしいが、幾分異ふのは腕が割合に長く足が割合に短い點、足で物を握る事が出来る點、全身の毛が濃く長い點などである。

然し人間の中にも、安南人の如に足の指が大層よく猿に似て居るものもあれば、アイヌ人のやうに全身の毛の濃く長いものも居るのであるから、之等の點ばかりでは區別がつかかねる。

厭世的な猩々、樂天的なチンパンジー

更に一層人間によく似て居るのは、智情意の精神方面である。然し前の三種は各自其の性質が異つて居て、猩々は本國の森林中に居る時には非常に活潑であるが、一旦捕へられて檻の中へ入れられると、舉動も鈍くなり、細く眼を開けて檻の前に立つ見物人を見る、其の容貌には如何にも世を果敢むと云ふやうな色が現はれて居る。丁度監獄に入れられた罪人のやうな様子をして居るのである。

處が、チンパンジーは性質が快活であるから、飼はれて居ても平氣である。毎日機嫌よく暮らす。人間にも馴れ易く、種々の藝を覚え、好んで滑稽を演じて人を笑はせ、喜ばせる。人に遇つたり別れたりする時、握手したり、燕尾服を着、高帽子を蒙り、白い手袋を穿めた手に洋杖を振りまはしながら、意氣揚々と歩きまはつたりなどする。又巻煙草をブカ／＼燻したり、フォークと小刀とを握つて手際よく西洋料理を食べたり、眼科醫の診察

を受けて適度の近眼鏡を掛けたり随分面白い曲藝を演ずる。先年佛蘭西のパリで大評判になつたチンパンジーは名前をコンシユルと云ひ、頭髪にはコスメチックを塗り、自轉車を乗り廻して大喝采を博した。ゴリラは力の強い性質の猛悪な大猿で、其の産地の亞弗利加之土人は、百獸の王と云はれる獅子よりも、此のゴリラを恐れて居る程である。だから生長したのを生捕りにする事は到底出来ない。極幼少いのが捕へられて、歐羅巴へ二三度見世物として送られた事がある許りだ。ゴリラに就ては、斯う云ふ事が知られて居る。此の動物は親子や夫婦の仲がよく、巢は樹の上三間ばかりの處に造り、其の中に牝と子供とを眠らせ、牡は其の巢の下で張り番をしながら眠る。之れは何の爲めかと云ふに、豹がやつて来て牝や子供を害うのを防ぐ爲である。食べ物は主に果實であるが、堅い殻のある果實などは石でコツ／＼と其の殻を壊して中の實を出して食ふ。その他肉でも野菜のやうなもので、何でも食べる。

『或時、森の中で牝のゴリラが二三疋の子供を連れて果實を採つて居たが、牝ばかりムシャ／＼食べて子供には餘り遣らない。すると遠くの方で此の有様を見て居た牡のゴリラが大層立腹して、其所へ飛んで来て牝を激しく打つた。』と、それを實際見て居た或學者が話したさうである。右の三種の外、ギボンと云ふ猿は手が長いので俗に手長猿と云はれるが、體は小さいけれども其の構造は非常によく人間に似て居ると云ふ事である。

智力の一點が人間に劣る

日本の猿や犬でも芝居の真似をする。縁日や祭禮によく見る猿芝居の

人間に最もよく似た動物

八
 猿の物真似は、唯だ演なければ打たれるから演るので自分の演じて居る事の意味などは分つて居ない。處が前に云つたチンパンジは言葉こそ分らないが自分の演ずる事は十分理解つて居るらしい。長く之れを飼ひ馴らして居た人の話に依るに「朝夕接近つて其の世話をして居ると獸類とは思はれないやうになる。而して自分の云ふ事は向に通じ、向から云はうとする處は、其の顔色なり音聲なり又は身振なりで容易く判断する事が出来る。其の氣持量見は人間と少しも異はぬらしく、暫らく交際して居ると不知不識のうちにも夫れを人間として待遇するやうになる。」と云ふ事だ

嘗て猩々の子が病氣に罹つて飼養人に抱かれ薬を飲まされる處を見た事があるが、子猩々は苦い薬を飲み終つてから、大きな眼を見張つて其の飼養人の顔を眺めた。而して頭を優しく撫でられると、如何にも嬉しさを

うな容貌をした。其の有様が全然聞分けのよい人間の幼兒のやうで思はず胸が迫つた。

斯う云ふ風に姿から心まで人間によく似て居るけれども、唯だ一點知識と云ふ事にかけては到底人間には適はぬのである。即ち人間が彼等に立優つて居るのは智力の一點である。だから若し我々にして智力が足りなかつたり禮義を知らなかつたならば、チンパンジや猩々と何等の選ぶところが無い譯である。語り終ると叔父さんは「お前達もチンパンジや猩々よりえらい積で居ても勉強しないと猿の同類になつて了ふよ。」と半ば戲談らしく半ば眞面目に斯う云つて太郎と花子の顔を覗き込んだ。

或る日曜日の午後太郎は叔父さんに向つて「象は鼻が彼様に長くて、

邪魔になりはしないでせうか！」と、突然奇問を發した。さすがの叔父さんも聊か面喰つたが、早速象の鼻に就て話し出した。

鼻の動物の鼻の話

鼻を水鐵砲に代用して納涼

象はあの長い大きな鼻を何にするか、人間のやうに唯だ鼻孔から呼吸をするだけの用ならば、真に無用の長物と云はねばならぬ。併し、さうでないといふ事は、一寸動物園へ行つて見て居ても分る。即ち鼻の先で甘藷の小片を拾つて口に入れたり、藁を揃へて口に運んだりする。其様な風に物を食べたり飲んだりする爲に使ふ外に、物に觸つて見る。又臭氣を嗅ぐ力も非常に強い。

象の産地は亞弗利加とか印度と云ふやうな熱帶地方であるから、日中太陽の光の直接に當る處を歩けば随分熱い、其所で象も滅多に日光の射す處へは出ないで、森林の奥深く隠れて居るが、どうも熱くて堪らぬと云ふやうな時には、其の長い鼻を水溜の中に突込んで、思ふ様水を吸ひ入れて、グルリと背中の方へ廻し、ジャー／＼と撒水をしてお涼をする。つまり彼の長大な鼻は水鐵砲の役目をするのである。又、日向を歩かねばならぬやうな場合には、日光を遮る爲に塵芥、木葉、葉など有りあふ物を鼻で巻いて背中へ持ち上げる。

鼻の本職と鼻の道樂仕事

一寸見たところでは、随分荷厄介のやうに見える象の鼻も、中々重寶なものである。だから、象自身も非常に之れを大事にして居て、滅多な事には

使はないのである。
象は何も彼も皆な鼻でやると思つて居ると大間違ひである。馴らされた象は材木を運んだり、又沼に沈んだ大砲を引出すと云ふやうな藝當を演ずる。

けれども然う云ふ事には決して大事な鼻は使はない。力仕事は大抵綱を口に啣へてやつたり、馬具のやうな物を體軀につけてやるのである。印度の象が鼻を振上げて突貫して行く様などが、よく繪にかいて有るやうだが、實際は決して其様な事はない。危険な場合には鼻を巻いて怪我をしないやうに努めるのが常である。

さて、如何云ふ譯で象の鼻は斯くも長くなつたのであらうか。よく見世物の象が演るやうに、人を巻いて其の背中へ乗せたり、喇叭を吹いたり、南京豆を拾つたりするが爲に長くなつたのであらうか。否、然うではない。

之れを知らうと思へば動物學を研究せねばならぬ。先づ昔も昔もづつと大昔初めて象が此の世に現はれた頃は、動物の數も種類も今日のやうに多くなかつたので、食べ物や飲み物は到る處に、有り餘る程澤山あつた。其所で象は一生懸命食ひ込むうちに、だんく體軀が大きくなり、夫れと共に頭も彼の通り巨大なものとなつたので、細長い頸では之れを支へる事が出来なくなつた。
處が體軀が大きくなつたと共に、丈も高くなり、其割合に頸が長くならぬので、地上の飲食物を口に運ぶ事が不便である。其の缺點を補ふやうに鼻が異常の發達をしたのである。故に呼吸をしたり、飲食物を口に取込んだりする事が彼の鼻の本職で、喇叭を吹いたり人を背中に乗せたりするのは、象の道樂仕事なのである。

陸上動物の中で第一流の游泳上手

鼻の話はもう止さう。象は游泳の名人で、陸上にばかり棲んで居る哺乳動物中では、象の右に出るものがないと云つても可い。サンダースと云ふ象使ひの名人は、或日七十九頭の象を連れて出て水を泳がせたが、初め六時間泳ぎ続けさせた後、水邊の砂地で少時休ませて、又三時間泳がせたけれども別に疲れた様子も見えなかつたと云ふ。速力は大概一時間一哩の平均ださうである。

其の游泳法も頗る巧妙で、頭までもズブリと沈めて泳ぐ事も出来れば、巨大な體の大部分を浮かせて泳ぐ事も出来る。但し全身を沈めた時でも呼吸をする爲に鼻の先を少許り水面に出して居る。此時其の鼻の先を棒切で突衝くと云ふやうな悪戯でもしやうものなら、夫れこそ大變であ

る。忽ち小山のやうな其の體軀を浮かせて、あの大きな牙にかけるとか、又其時は無事に済んでも、後で泥水をぶつかけるとか、屹度復讐をする。象は非常に記憶力の強い動物で、恩も怨もよく覚えて居る。

性質温順しくてよく人に馴れるが、分けても小兒が好きだと見えて、直ぐに其の友達となる。あの大きな體軀で小兒の友達に少々不似合だけれども、如何にも優しさうな其の眼貌には、成程小兒でも懐きさうだ。殊に象の羞恥む時は非常に可愛らしく、例の大きなすう體を左右に揺ぶつて駄々ツ兒のやうに叫ぶ。

『續いて象狩の話をしよう。』と叔父さんは話し續ける。

生命がけの象狩

象狩の目的は二通りある

象を狩るのは、一體どう云ふ目的であるか。一は諸方の動物園や見世物に出したり、之れを馴らして物を運搬させたりするのと、もう一つはあの大きな牙即ち象牙を探ると、都合二通りの目的がある。

初めの方の目的では、象を殺しては駄目であるが、後の方の目的ならば、象は死んでも牙さへ取れば可いのである。従つて其の狩り方にも相違がある。今話さうと思ふのは象牙を探る爲めの象狩りであるが、中々壯快である。

英國で有名な象牙商人で長い年月亞弗利加に於て象牙狩をやつて居た或人は『面白い仕事ではあるが、一方から見ると實にどうも危険な仕事である。』と云つて居る。彼が盛んに此の象牙狩をしてゐる頃の話は少し

書いて見よう。

或日六十噸許りの舟を艤装してナイル河を遡つて行つた。餘程奥深く進んで、象の居さうな處まで行つた。而して腰の邊までもある泥水を渡り、草木を切開いて大きな赤蟻に刺されるのを我慢しながら進んで、やつとバンガラ族の土人がある小さい部落に辿り着いた。

『象の群集は何所邊に居るだらう。』と大概の見當を其所で聞き、それから案内者を雇入れて象群の方に向つて出發した。

直ぐ足もとに大きな牡象の足痕

丁度時節が雨季と云つて雨ばかり降り續く時季に入つた時であつたら、空はどんよりと曇つてゐて、夜になるとザア〜と大粒な雨が降つて来る。彼も野山を跋渉つた経験は決して少くないが、土人には到底叶は

ぬ。彼等は天氣が續けば水はどう云ふ處で得られるか、又雨天が續けばどうして毒蟲の襲來するのを防ぐかと云ふ事をチャンと知つて居る。毒蟲に刺された時には、何う云ふ木の葉を揉んで其の液をつけたらばよいか、又何う云ふ草を焼けば其の臭氣に毒蟲毒蛇が寄つて來ないかと云ふやうな事もよく知つてゐる。其他土人の山や野に就ての經驗と知識とは驚く外ないのである。

さて、彼は其の翌日は、早朝起き出て象の居る方へと進んだが、何しろ竹が蠱々と茂り、一面に藪に塞がれた處を切り開いて行くのであるから、通りの苦心ではない。殊に大きな蚊がゐて遠慮なく體軀を刺すので、其の方丈でも大變である。

まだ幾らも行かないうちに日が出た。それから又一時間も行くと、高さ二三十尺もあらうと思はれる大竹のギツシリ茂つた林の中に来た。

すると、直ぐ自分の足下に近く、牡象の歩いた跡を見つけた。一體象は其の後足の裏の形が牡と牝と異つてゐて、牡の方は細長く牝の方は比較的圓みをもつてゐるから足痕に依つて牡であるか牝であるかと云ふ事は直ぐ分るのである。處が象の群が人に追はれて逃げて行く時には皆な自分の先に走る象の足跡を踏んで行く癖があるので、何頭居たかと云ふ事を知る事は出來ない。

霧を透すと大象の頭がボンヤリと

今、大竹林の中で發見した足痕が新しいので、たつた今歩いた許りと云ふ事が分る。又其の痕が非常に崩れてゐるので、之れは餘程の速力で通つたと云ふ事も分る。

象が急いで歩くと、大變に早いから、今其處に居たと思つても、既に何里遠

方へ行つて居るのか分らぬ。のみならず、雨季に入ると少しも聲を出さぬ動物であるから、尙更ら捜すのに骨が折れる。向を見ると、まだ朝霧が一面に立單めて、少し遠方は明瞭分らぬ。彼等は夫れから又一時間許りも象の足痕を躡けて進んだ。霧は容易に晴れぬ。竹の葉から露がボタ／＼と散る音が聞えるばかり、森として誠に静かな世界である。と、細い道の前方に、ボンヤリ現はれたものがある。霧を透して見ると、紛れもない大象の頭である。折々バタリ／＼と耳をはたく。多分蛇を追拂ふのであらう。而して其の長い鼻を空の方へ高く持ち上げてゐるのは、何か危険なものが近づくかどうかを嗅ぎ分けてゐるものと思はれる。さすがの彼も不意だつたので、アツとばかりに驚いた。連れてゐた黒人も思はず大聲を立てた。すると、此時早く彼の時遅く、其の大象は此方へ

向つて突進して來た。
危機一髪とは此の事である。

象は疾風の如く躍進して來た

彼等は凡て怒れる大象の、あの大きな牙にかけられ、足に蹂躪れて了つたのかと思つたが、さうでない。豪膽なる彼は持つて居る銃を取るより早く、狙ひも付けないで一發ズドンと放つた。彈丸は非常な音響を發して爆發した。確かに手筈があつた。象の前額に當つたらしい。それで先づ象の突進する丈けは阻む事が出來たと思つたが、彼は鐵砲の反動で後の方へ仰向に彈き倒された。もう起上る時間がない、象は眼前に躍進して來た。少し横に轉げて象の

方を向くと直ぐ傍をば額からダラ〜と鮮血を滴らせながら疾風の如き勢で行過ぎた。

之れは彼を目蒐けて飛び來つたのであるけれども餘りに其の勢が烈しかつた爲弾みを喰つて行き過ぎたのだ。すると象は又非常に敏捷く其の大きな體軀を回轉して、「今度こそは免さぬ觀念しろ。」と云はんばかりにやつて來た。

此時彼は立上つてゐたが銃は先刻取落したのでどうする事も出來ない。まゝよどうともなれと覺悟を定めて居ると、突然反對の方に當つて銃聲が聞えた。すると象は又もクルリと體軀を返して銃の烟を目掛けて突貫した。そこで彼は辛うじて危い生命を助かつて逃延びたのである。さて、突然起つた銃聲は如何した譯かと云ふに、先刻象を發見した時黒人は驚きの餘り銃を肩にかけたまゝ、反對の側の竹林に逃込んだ。そして

木の根に躓いて倒れた拍子に、其の銃が自ら發射したのであつた。

畜生！逃がすものかと追ひかける

少し心が落着いて來たので、象の方を見ると、竹藪の中をば丁度草でも押分けて行くやうにして逃て行く處であつた。

「畜生！逃がすものか。」と、今度は彼の方が勢づいて、銃を小脇にかい込みながら其の後を追うた。

何所まで行くとも分らぬ。非常な早さで森林を抜け岡を越え水溜を飛び越えて行く。凡そ五時間も足痕を躡けたと思ふ時ふと廣やかな原に出た。見ると其處には二十頭ばかりの象が居る。幸ひ彼等は風下に居るので象はまだ敵の近づいた事を嗅ぎつけぬらしい。

先程撃ち損つたのも群の中に居るが、額から流れる血が眼に入つて物が

見えない様子だ。

「今度こそは。」と念にも念を入れて狙を定めてドンと切つて放つた。弾は誤らず頭部に中つて、手負の象がコロリと倒れた。之れを見た他の象は大騒ぎをして四方八方に逃げ出したが、彼の連發した彈丸に中つて又も三頭の大象が倒れた。此の物音を聞きつけた土人が諸方から大勢寄つて来て、我れ先にと象の皮を剥ぎ肉を切取る。やがて後には大きなずう體の骨のみが残つた。彼等は大きな象牙丈を取つて引上げた。

稀には一本三十貫目位の象牙がある

一體象牙一本の重みは普通六貫から十二貫目位で稀にはそれよりもズツト重いのもあるが、之れを都市から何百里と隔つた蠻地で澤山獲つて

も其の運搬が中々一通りではない。だが汽車のある處まで兎に角持ち出せば、もう占めたもので、一噸(約二百七十貫)が三萬圓近くの高い値段でドシ／＼賣れるのである。

近來象牙の需要は段々増加して行くやうであるが、象牙のうちでも最も金になるのは、球突に使用ふ球で、牙一本に就て五個取れるか取れない位である。と云ふ。ロンドンには此の球突の球二萬個を持つてゐる商店がある。その總金額は十六萬圓、二千頭の象を殺さねば獲られない譯だ。尚ほ象狩に就ては面白い事が澤山ある。殊に暹羅では國王が賓客の慰みとして象狩を催すことがある。其の場合には決して殺すのでなく、四方から追詰めて數十頭數百頭を集めるのである。象牙狩とは全でその趣が變つてゐる。

「併し之れは又折があつたら話すとしよう。」と云つて叔父さんは一先

づ象の話を切上げた。

「お猿と象の話を聞いたから、今度は河馬に就て何か話して頂戴。」
と太郎と花子が強請るので、叔父さんは河馬狩りの話をして聞かせた。

怒れば小舟でも噛み砕く河馬

水の底を自由に潜行する河馬

河馬は南部及び中央亞弗利加の湖水と河との間を往來して居る動物で身長が十三四尺から十五尺高さが五尺に達する。全身暗褐色の皮膚に掩はれ、肢は非常に短かく肢の先には四箇の爪がある。胴は大きな麥酒

樽のやうな形をしてゐて、至つて醜い。頭も大きく殊に其の口などは頗る廣大なもので、之を開けば略々正方形となり、強く鋭い齒が恐ろしげに現はれる。

食物は草、蘆葦、砂糖黍、稗などで晝間は河や湖に隠れて居るが、夜になると陸へ上つて来て野原や田圃を荒しまはる。其所で其の害を防ぐ爲に河馬狩が始まるのである。尤も其の長い牙は義齒の材料となり、皮は鞭に造られ、脂も工業用に供せられるので、一頭十圓か廿圓位で賣買される。さて、河馬は體が重く四肢が短いので、水の中から急に陸に上る事が出来かねる。だから一方より追へば陸地には行かないで水中に免れるのが常である。而して河の底や湖の底へ沈んで自由自在に潜行する事が出来る。けれども呼吸をしなければならぬから、五六分も経てば又頭を水面に現はして空気を呼吸する。此時に河馬の在り場所が分るだけで、水

怒れば小舟でも噛み砕く河馬

中に沈んだが最後、何所を歩いて居るのかさ、つぱり分らぬ。之れを狩るにも、其の水面に現はれた瞬間を逸してはならぬ。併し、僅に鼻だけ出して呼吸をする場合があるから、そんな時には容易に其の所在を知る事が出来ない。

或年の夏、前の米國大統領、ローズヴェルト氏が亞弗利加に遠征した時、壯快な河馬狩を行つた、今其の話をしてみよう。

場所は英吉利領の東亞弗利加のナイバシヤ湖で、此の湖水にはいつも二三十頭の河馬が狩獵の爲に放されて居るのださうである。

小舟でも噛み砕く大きな口

愈々獵が始つた。ローズヴェルト氏は二名の土人を従へて小舟に乗り込んだ。大勢の勢子どもは各方面に程よく配置られた。

河馬は一體に臆病な動物であるから、小舟を臆して之れを狩らうと云ふやうな場合には人影を見ると水中に潜つて了ふので、極靜かに假令その舟の下を潜行する河馬があらうとも決して感付かれぬ程靜かに漕がねばならぬ。

斯くて、漕ぎながらも絶えず水面に注意して新しい空気を吸ふ爲に現はれる河馬を、今や遅しと待構へた。處が遙か彼方の水面に忽然河馬が頭部を現はして、次第に小舟を目がけて進んで來る。ローズヴェルト氏は銃を取つて身構へたが、遂に發砲の機會が來ないうちに河馬は又沈んで了つた。

其後一分、二分、五分経つても六分経つても河馬は出て來ぬ。どうしたのかと思つて居ると、遙か彼方の湖の中島附近に潜伏して居る事が分つた。勢子は一齊に其所を驅り立てたので、俄かに騒ぎ始めて其の四面に大き

な波濤が起つた。ロースヴェルト氏は更に其方に向つて最後の突貫を試みようとしたが、河馬は何等の抵抗もしないで尙ほ一層遠くの方へ逃げ延びた。

三〇

一同は之れを追撃し、疲労した河馬の群を尙も脅迫しようとしたので、流石の河馬も大に怒つて其の兇猛な本性を現はして、勢子共の小舟を目標けて突進して來た。幸に其時は何の被害もなかつたけれども、ウツカリすると小舟は其の大きな口で噛み砕かれ、獵者も其の牙にかけられて、悲惨な最後を遂げるやうな事が屢々ある。

半身を直立して苦しさうな唸聲

さて、ロースヴェルト氏は時こそ來れと銃を取上げて狙ひ撃たうとしたが、懸てズボリくと河馬は水に沈んで再び四邊が靜になつた。と、此時

氏は極近い處に一頭の大きな河馬が跳り上るやうに半身を水上に現はしたのを發見したので、ズドンとばかり火蓋を切つた。狙ひは過たず其の腦を横様に貫いたのである。河馬は痛手に堪へず、半身を直立して、苦しさうな唸り聲を發した。氏は止めの第二發を放つた。斃されたのは河馬の群の中でも頭領と思はれる體格の一番大きな牝であつたが、其の配偶の牡は、自分の妻の殺されたのを憤つて復讐を企て、今にもロースヴェルト氏の方へ向つて突進しようとする氣勢を見せたけれども、一方に血潮に染つて死んで居る妻の屍體を見ては、其の傍も離れたくないやうな風で、暫らくは迷つて居るらしかつたが、其のうちに勢子の彈丸に中つて、牡も斃されて了つた。

見る間に二頭の仲間の者が殺害されたので、他の河馬は何時しか姿を隠して、其後は容易に影を現はさなかつた。斯くてロースヴェルト氏の一行

は其の成功を喜びつゝ引上げた。

奇抜な埃及の河馬の獵法

銃で撃つのは最も新しい河馬の獵法であるが昔埃及では河馬の出さうな葦の茂みの中へ乾いた豆を澤山積んで置き飢えた河馬にうんと夫れを食はせる。すると河馬はタラフク食つた後頻りに水を飲む。乾燥した豆はだんく胃の中で膨脹し遂に食傷を起し又甚しいのは胃が破裂して斃れる。斯う云ふ奇抜な獵法を行つた。又南部亞弗利加ではわなと陷阱で獵するやうである。併し河馬が歩く時には周圍を見まはしたり嗅いだりして非常に用心深いからわなには滅多にかゝらぬ。之れに反して陷阱の方は時々奇功を奏する事がある。けれども運悪く陷阱の處へ河馬が來なければ如何とも仕方がないのである。

中央亞弗利加の一部では土人が獨小舟と云ふ粗末な小舟に乗つて河馬の居る湖水なり河なりに漕ぎ出し非常に目方の重い鉛を打込んで斃す。今日でも此方法が一番多く土人間に行はれて居る。

「動物園に居るのを見るとまるで大きな甘藷を轉がしたやうで、ノソリく〜とカラ意氣地のない鈍物のやうだけれど、あれで其の本國では河馬君も中々大した勢ひらしい。」と叔父さんは話の局を結んだ。

其の翌日叔父さんは太郎の頼みに依つて虎狩の話をした。

陷阱で生捕られる動物園の虎

骨や生血の一面に散はつた虎の穴

各地の動物園や見世物の虎だとか獅子だとか豹だとか云ふやうな猛獸は、一體どうして捕へて連れて來るのだらうか。西洋には然う云ふ猛獸や珍しい動物を賣買する商人が居て、獅子が一個買ひたいと申込めば、直ぐ檻に入れたのを送つて呉れる。又虎が一個欲しいと云へば、之れ亦早速註文に應ずる。其の商人はどうして之れを捕へて來るのであらう。今假に虎の註文が來た、先づ虎の産地へ獵人を遣り、其の地で虎狩に熟練した土人を備つて其の捕獲に着手するのだ。一體虎は枝や葉の茂つた藪の中とか、叢の茂みとかに好んで棲んで居るものだから、心當りの處へ行つて見て、果して其所に居れば、附近の草や木の枝などはひどく倒れ伏して、其邊には一面に獸類の毛や骨や血の黒く塊となつたのやが散らばつて、『成程、虎は獲物を此處まで持つて來て、安心して食ひ散らすのだ。』と合點れる。

さて、愈々虎の棲處の見當がつけば、程よい處を選んで、土人に陷穽を掘らせる。其の形は丁度麥酒罎のやうに、上の方が狭く、下の方を廣くするのである。深さは一丈二三尺で、直徑は入口の邊が六七尺、底が一丈位である。穴が出來上れば、其の上へ籐か竹かで編んだ蓋をし、其の蓋の上には木の葉や枯草などを置いて、穴などの有りさうにも見えぬやうにする事は云ふ迄もない。而して蓋の真中に山羊の子を縛りつけ、其の耳には小石を吊り下げて置く。之れで陷穽はスツカリ出來上つたのである。狩人は土人と共に一先づ其の場を引上げる。

山羊の子の耳に石を吊して罎とす

取残された山羊の子は、石を吊されたので耳が痛む、且つは四邊に誰れも居なくなつたので寂しい。其所で悲しい聲を出して鳴き立てる。夫れ

が藪の奥に居る虎の耳に入ると、

『はてな、何だか甘味さうな聲がする。』と思つて耳を敬てる。聲に味は無いけれども、毎度山羊を食つて其の味に舌鼓を打つた経験があるから、夫れに依つて聲を聞いた許りで味を聯想するのであらう。兎に角虎は山羊の聲を聞くと其の方へ忍び寄る。

深く繁つて居る藪でも、藪でも、虎は草の葉一つ揺がせないやうに大事にも大事を取つてチリ／＼と近づく。聲と香とをたよりに山羊の直ぐ眼前にまで寄つて來ても、じつと狙ひを定めてからでなくては飛びつかぬ。非常に用心深い動物で、大きな牛を攻撃する時も猫の子を攻撃する時も矢張同様の警戒と準備をしてかゝるのである。

愈々狙ひが定るとウーと鼻から凄じい唸り聲を洩らしてパサリと山羊に飛びかゝる。と同時に蓋も山羊も虎も諸共に陥穽に落ちる。『失敗つ

た。』と思ふと虎は火のやうに怒り、山羊も蓋も滅茶／＼に爪や牙で引裂

き、尙ほ暴れに暴れるがどうする事も出来ない。

少し氣が静まると穴の口を見上げて上らうとするけれども、前に云つたやうに饜の形になつて居るから足場がない。其のうち次第に疲れて來て少し穩かになる。此時籐で編んだ網を穴の中へ投げ入れるのである。網は非常に丈夫なもので虎が如何に噛んだり引掻いたりしても容易に切れない。其の網を投げ込まれると、少し静つた虎は再び怒り出して荒れ狂ふ。其のうちに足が網の目に入つて體軀にまでも纏れ付く。すると益々疔癢を起して之れを口で搔きのけやうとする拍子に、首も其の網の目に嵌つて遂に身動きも出來なくなつて了ふ。で、唯だウー／＼と大きな唸り聲を出して横はつて居るやうになる。

猛獸の仔を搔拂つて山羊の乳で育てる

狩人は其の時を見計つて静かに穴の中に下り、網で虎の全身を包んで引上げ、直ちに檻に入れて其の網を解いてやるのである。

又時には穴の中へ最初鼠取器のやうな仕掛の大きな器械を入れて置いて、虎が飛び込んだが最後其の器械の蓋が閉ぢて内側から開く事は出来ないやうになる。其所で直ぐと其の器械を引上げると云ふ方法も行はれる。

昔朝鮮では虎を捕へるのに、一種特別の方法を用ひた。それは先づ虎の通路に當つて、木や竹などを組み合せて拵へた一方口の籠のやうなものを装置し、其奥に餌を置くのだ。長さは五六尺、虎が體を小さくして辛うじて入れる位の大きさである。従つて一旦入つたら後を振向く事も出

来ねば、體を振ぢまげて方向を變へる事など無論出来ない。

獵師は以上の装置をしておいて、附近にかくれて待つてゐる。そのうち虎がやつて来て、其の中に入るのを見ると、忽ち驅けつけて入口を塞ぎ、籠の儘持ち歸るのである。今でも朝鮮人は稀れに此の方法で虎を捕へるさうだ。

陷阱を拵へて捕獲するのは虎ばかりではない、矢張り動物園に居る獅子だの、豹だの、皆な同じ手段で捕へるのである。

又、之等猛獸の幼兒を其の巢から奪つて来て山羊の乳で育て上げる事が近來盛んに行はれて居る。其の幼兒を捕るのは、牝も牝も共に食物を獲る爲に他所に出かけた時でなくてはならぬから、滅多にそんな機會は見つからぬ。幸ひにして見つかると、そつと棲處へ忍び込んで幼兒を搔拂つて一目散に逃げ歸るのである。

『何の事はない空巢狙をやるのさ。』と叔父さんは最後に太郎と花子とを笑はせた。

「大猿の話象の話河馬の話虎の話どうも餘り恐い大きな動物の話ばかりでは面白くないから、今度はもつと小さい動物の話をして頂戴な。」と花子が註文した。
『小さい動物。よしでは蚤の話でもしよう。』と叔父さんも中々人が悪い。

馴らせば蚤も藝をする

體の長の二百倍を一飛にする

春先から夏にかけてチク／＼肌を喰つて痒い事をする蚤は餘りありふれた動物である爲めに、却つて注意して見るものが少い。肉眼では一寸よく見えかねるが、蟲眼鏡で検べて見ると中々恐ろしげな形をして居る。先づ體は凡て黒味を帯びた茶色で横に幾つも筋がある。胴は左右から押しつけられたやうに平たくなり、口は人や獸類の皮膚に噛み付いて、血を吸ひ出すに都合の可いやうに出來て居る。

肢は凡てで六本あつて、後の二本は非常に長く、夫れで頗る遠方へ飛ぶ事が出来るのだ。西洋の學者が實驗した處に依ると、體の長さの二百倍を一飛にする事が出来ると云ふ。假に之れを人間に當嵌めて考て見ると中々面白い。先づ人間の丈を五尺としても其の二百倍だから千尺即ち百六十六間四尺を一飛びにする事が出来る譯だ。百六十六間四尺と云へば三町足らずである。隅田川なんか鐵橋も渡舟も必要がない事にな

る。次ぎに上の方へは體の長さの三十倍の高さまで跳ね上る事が出来る。云へば、之れを人間に當嵌めると百五十尺即ち六十五間の上に飛上られるのである。東京第一の高塔と威張つて居る淺草の十二階も、たつた百二十尺しかない。云ふから、唯だ一飛びで其の頂上よりも少し上の方まで上る事が出来るのだ。斯うなると富士登山なども非常に容易く出来るやうになる。

卵から蛆となり蛹となり蚤となる

蚤は垢や塵のある不潔な處に棲んで居て、夏分元氣よく跳ねまはる事は誰れしも知つて居る處だが、其の産み付けた卵から小さい白い蛆が出て、暫らくすると夫れが蛹となり、其の蛹から聽て蚤が飛び出すと云ふ順序で繁殖する事は知つた者が少い。

獨逸あたりでは蚤を飛べなくして、いろ／＼の曲藝を教へ込んで見世物にして居る。初め飛べないやうにするには、長い間低い平たい箱に入れて閉込めて置くのである。すると跳ね上りたくても箱の天井につかへて飛べない。幾度も／＼飛ぼうとしては、勿ね返されるうちに、だん／＼跳る事を忘れて、後にはまるで飛べなくなつて了ふ。食物はどうするかと云ふに、日に何回宛か人間が腕にたからせて生血を吸はせるのである。

車や大砲を引いてあるく蚤の藝當

さて、全く飛ばなくなつた蚤を取出して、いろ／＼の藝當を仕込むのだが、現在行つて居るのは、極く細い絲を其の體に結びつけて、小さな車や大砲を牽かせたり、ブランコを爲せたりする位の事である。何しろ小さい蟲の曲藝だから、大勢で之れを見物する譯にゆかぬ。一人宛蚤遣ひと差向

ひになつて見物するのであるが、蚤遣ひの先生は蟲目鏡を片手に持ち片手にピンセットを持つて蚤の世話をする。我々にはお話にならぬ程汚いものと思はれて居る蚤も、斯うなると満更棄てたものでもないのだ。

「蚤の話は餘り面白くなかつたと云ふのか、ちや今度はもつと面白い話をしよう。處で小さな動物では何が可からう。蟻の話にしよるか。」と叔父さんが云ふと、

「蟻が夏の間にせつせと働いて冬の食物を蓄へる話や寒くなつて霜が降り出した時一疋の斯螽が蟻の穴の中へやつて来て哀れみを請うたと云ふやうな話なら僕はもう知つて居ます。」と太郎も中々動物通だに見える。

「いや、叔父さんの話はそんなお伽噺ぢやないんだ。」

蟻が菌を作る話

一時も遊んで暮さぬ蟻

蟻は澤山寄り集つて生活し、一種の社會を形成つて居る事は有名な話である。其の生活の様式が人間の生活状態に非常によく似て居る。先づ蟻の社會には一疋の女王が居て、一同の蟻に推戴され侍かれて居る。而して凡ての蟻は互に信愛して決して喧嘩をするやうな事はない。又彼等は日夜孜孜として種々の仕事をして、少しも遊んで暮したり、懶たりしない。如何な事をするのかと云へば穴を掘つたり塔を築いたりして巢を造る。又隧道を穿つたり、食物を遠方から運んだり、他の蟲類を畜養うて夫れか

ら甘い汁を出させて自分達の幼児を育てると云ふやうな面白い事をす
 る。而して一旦緩急の場合には戦争もする。殊に驚くべきは人間もま
 だ知らない一種の通信方法で、互に其の意志を交換する事である。よく
 其の生活の有様を研究すると非常に面白い。併し以上の如きは餘り珍
 らしい話でもないが、茲に話さうと思ふのは、蟻の一種で「葉切蟻」一名「日
 傘蟻」と呼ばれるものが、菌類を培養する事實である。此の現象は從來全
 く注意されなかつたが、今から十數年前南亞米利加の熱帶地方で初めて
 見出されたのである。

珍妙な葉切蟻の行列

人間が野菜や椎茸などを培養するやうに、此の葉切蟻も一種の菌類を作
 るのである。いや人間よりも、もつと巧妙な手段で作るのだ。

熱帶亞米利加の森林中を行過ぎる旅人は道を横切る葉切蟻の行列を見
 る事がある。夫れは各自口に木の葉の嚙切つたのを啣へ、丁度日傘でも
 翳したやうにして居る。日傘蟻と云ふ名の出たのも、つまり之れからで
 ある。

同じ葉切蟻の中にも五つの區別がある。第一は女王蟻、即ち雌蟻、第二は
 雄蟻、第三は職蟻、即ち仕事をする蟻、第四は大頭の蟻、長い紅い觸毛が生へ
 て居る、第五は藥罐頭の大蟻で、其の中第四と第五とは軍蟻と云はれ體も
 他のものより大きい。平素は職蟻を護衛して、之れに危険のある時防禦
 する役を勤めて居る。

處で、日傘のやうな木葉の小片は一體何所から切り出すかと云ふに、先づ
 職蟻は隊伍を整へて或る目的の植物に向つて進行し、之れに達すると我
 れもくと幹を攀ち枝から葉に移り、思ひくりに夫れを噛み切つて口に

啣へ、歸途に就くのである。其の噛み切る時には鋭い鋏のやうな顎で葉の縁から切始めて二三分間で切り取り、一振ふつて頭の上に擔ぐのである。其の植物は珈琲樹、薔薇、甘藍、蜜柑類、アイビム、マンゴ等の熱帯植物であるが、一旦此の蟻につけられると其の植物は大抵枯らされて了ふので、農家の損害を被る事は夥しいものである。而して若し此蟻の巢の附近に氣に入つた植物がない時には半里位の遠方へも出かけて切つて來ると云ふことである。

葉を噛み碎いたもので菌畑を作る

次に、切つて來た其の葉は何にするか。巢の壁を拵へる材料にするのだとか巢の内部の造作に用ひるのだとか、又は一種の紙を製造するのだとか葉の中の液汁を吸ふのだとか、いろいろの説があるけれども、獨逸のメ

ーレルと云ふ學者は自分で南亞米利加へ行つて此の葉切蟻を研究した結果、其の葉の小片で拵へた塊に菌類を培養して食物とすると云ふ事を確めた。

他所から運んで來た葉をば、巢の外で細かく噛み碎き、顎と足とで軟かく捏ねて餅のやうなものとし、更に之れを搗き返してカステーラか海綿のやうなものとして、少しづつ、夫れを巢の中へ運び入れ、奥の廣い處に移して其所に菌畑を拵へる。すると其のカステーラのやうなものには菌絲が縦横に繁殖する。之れを側部から見ると白い微細な球が無數に附着いて居る。其の球が蟻の最も好んで食べるもので、職蟻は一生懸命で此の球を造る事を努め、而して之れを女王蟻や幼蟲に食べさせるのである。此の菌類は蟻茸と呼ばれて居るが、其の形は普通の菌類とは異つて居る。併し、巢の中から悉く蟻を逐ひ出して了へば、其の形は普通の菌類のやう

になつて了ふ。つまり職蟻が絶えず菌絲の發達を防いで居るから通常の形を現はす事が出来ないのである。けれども蟻は菌絲を充分に發達させては肝心の白い球が出来ないやうになるから、努めて菌絲の伸びるのを防ぐのだ。

百數十間の河底へ隧道を掘る

葉切蟻の巢は随分大きなもので稀には半町餘の間に廣がつて居る事がある。人間の屋敷でも半町に及ぶのは大きい方であるのに夫れが動物中でも小さい蟻の仕事であるから驚くではないか。又嘗て南亞米利加ブラジル國のリオデジヤネイロ市を流れて居る河の底へ隧道を掘つて一方の岸から向の岸へ行つて葉の小片を運んだ葉切蟻の一群があつたと云ふ事である。其の隧道のあつた處はロンドン市

のテムス河で云つて見ると、ロンドン橋の架つて居る附近河幅百廿一間と略同じかつたと云へば之れも亦非常が大工事である。一體に此の蟻は思ひ切つて大袈裟な事をするやうだ。

「其の生活状態が蟻と大層よく似た動物があるが——やはり昆蟲類で——それは何だらう。」と叔父さんに問はれて、太郎は直ぐに「蜜蜂です。」と答へた。併し蜜蜂はどう云ふ風にして生活するかと云ふ事は太郎も花子も餘りよく知らなかつた。其所で之れも叔父さんの説明を請う事にした。

女王もあれば兵隊もある蜜蜂の社會

注意深い職蜂の舉動

女王もあれば兵隊もある蜜蜂の社會

蜜蜂は少くて三四萬多くて七八萬頭位の團體を組み、一つの巢を構へて生活して居る。其の團體の中には雌蜂雄蜂及び職蜂の三種がある。雌蜂も云ふのは即ち女王と呼ばれるもので、一つの巢の中に唯だ一頭しか居ない其の他は少數の雄蜂と多數の職蜂である。

先づ四月頃の暖かな氣候になると、蜜蜂の團體は其の家とすべき樹の空洞とか人家の軒端の箱とかを捜し、愈々巢を造り始めるのであるが之れは専ら職蜂の仕事である。

職蜂は其體の腹部の環節から蜂蠟を出して、極めて美しい六角柱形の小さな室を造る。此の六角柱形の室は其一端に入口があつて底と底とをつき合せて二平面に造るのが普通である。

巢が十分出来上れば女王や雄蜂は其の中に入る。職蜂は夫れから食物を集めに諸方へ飛んで行くのであるが、再び歸つて來るのに巢の所在を

忘れないやうに、先づ入口の所を丁寧に見て次ぎに入口の近傍の様子をもよく見定め、少し飛んで四邊を見まはし、又少し飛んでは四邊を見廻し、もう之れならば大丈夫と云ふ覺悟が出来てから花を尋ねて飛んで行く。其の注意深い舉動は感心の外ない。そんな風にして置くから、決して巢の在る所を忘れるやうな事はなく、随分遠い處迄蜜を集めに行くが必らず其巢へ歸つて來るのである。

女王が雄蜂の群と共に新婚飛行

職蜂が花から採集した花蜜は、一度口の中へ入れて之れを巢の中に持歸り、皆な吐き出して他の蜂に分けてやるが、大部分は蜜藏に貯へる。又樹脂を持つて歸つて巢の中の隙間を塞いだり、花粉を集めて一種の食物を拵へて他の蜂に食べさせたり貯へたりする。

女王もあれば兵隊もある蜜蜂の社會

巢も出来、食物も十分に備へられると、今度は雌蜂即ち女王が子供を産む。其の時面白いのには、雌蜂が大勢の雄蜂と一緒に新婚飛行をする事である。それ迄は女王も雄蜂も狭苦しい巢の中で、ぼんやり暮して居るが、氣候もだん／＼暖くなり、巢も食物もスツカリ出来上ると、もう内にじつとして居られなくなる。で、先づ雄蜂が極く天氣のよい日中に巢の中をブンブン飛び廻る。すると雌蜂も浮かれ出して雄蜂の群に入つて、戀て巢の外に飛び出す。而して大空高く舞ひ上つて、茲に目出度く結婚式を擧げるのである。暫らくすると女王は巢に歸つて、夫れから凡そ四十六時間許り経つと卵を産み出す。

四週間ばかりで立派な職蜂となる

雌蜂は澤山の室へ各一つ宛卵を産みつける。スツカリ産んで了へば巢

の内は急に忙しくなる。職蜂はかねて貯へて置いた花蜜と花粉とで製造した仔蟲の食物を室の中へ入れてやる。夫れから四日許り経つと卵が孵つて小さい白い蛆が出て、職蜂の入れて呉れた食物を甘さうに直ぐ食べて了ふから、職蜂は又新しいのを持つて来て入れてやる。斯う云ふ風にして六日間も経てば其の蛆は室に一杯になる程の大きさになる。すると職蜂は室の口を蜂蠟で封じて了ふ。之れで職蜂の仕事は一段落を告げるのであるが、まだ全く濟んだのではない。夫れから職蜂は大勢がかりで室の上になかつて中の仔蟲を暖める。室の内では蛆は口から糸を吐き出して繭を造つて、其の中に籠り皮を脱いで蛹となる。雌蜂が卵を産み付けてから凡そ三週間ばかりの後、其の蛹は蜂となつて室を突き破つて出て来る。出て来た當分は體が濕れて居るから、職蜂が綺麗に舐めてやる。又食物も持つて来てやる。そのう

ち次第に元氣づいて、初めは色も白い弱々しい蟲であつたのが、一週間ばかりの後にはもう外へ飛び出すやうになる。

卵から孵るのは多く職蜂であるから古い職蜂と共に花蜜を採集て來たり、巢を造つたりするのである。而して新しく生れた蜂の破つて出た室は直ぐに職蜂が元の通りに修繕して又卵を産みつけられるやうにする。

兵糧攻に合ふ哀れな雄蜂

さて女王と共に新婚飛行をした雄蜂はどうなるかと云ふに、再び女王が卵を産む迄は用がないものであるから、邪魔物扱ひにされて、職蜂は寄つてたかつて之れを殺して了ふ。随分残酷なやうであるが、又一方から考へると、生かして置けば折角職蜂が骨折つて集めた食物もやらねばならぬし、一疋や二疋ではなく何百疋と云ふ多数の邪魔物が巢の中を塞いで、

職蜂の働きを妨げるから、止むを得ず征伐されるのである。而してどうして殺されるかと云へば、食物を些少も貰はないで飢え死する者もあるし、又甚しいのは職蜂のお尻にある鋭い刺鍼で刺殺されるものもある。蜜蜂は前に述べた通りで繁殖する事が非常に早いから、直ぐ數が増す。併し、一團體が餘り多數になると職蜂は巢の一部に特別に大きな徳利のやうな形をした室を造る。其處へ産みつけた卵には特に多量の食物を與へる。すゝいと普通のものよりも大きくなる。之れから生れたのが新女王である。

新舊女王の軋轢と巢内の大騒動

さア、斯うなると巢の内に大變な騒ぎが始まる。國家にも二人の王様が出來ると、南北朝のやうな大騒動が起るやうなもので、蜂の社會でも、舊女

王に從ふものと新女王に從ふものと二つの黨派に分れる。時には女王を暗殺しようとするものなど現はれ暫らく戰國時代とも云ふやうな殺伐な空氣が巢の内を立罩める。

併し結局は舊女王が新女王に位を譲つて自分の味方を引連れて其の巢を出て行つて又何所か適當な處を見出して巢を造るのである。

處で新女王が幾らも絶たぬ間に第二第三と生れて其の度毎に分家する事となれば遂には之れに仕へる職蜂が足りなくなる。そんな場合には職蜂は女王の内の一疋だけ残して他の女王を殺して了ふ。時には女王同士が決闘して勝つた方が天下を取ると云ふ壯烈な事をやる。實に面白いちやないか。

或日太郎は隣の犬が仔を産んだと云つて大騒ぎをして家へ歸つた。

そして是非其の中の一疋を貰ふのだと云つて喜んでゐる。叔父さんは夫れから思ひついて珍らしい犬の話をして聞かせた。

珍らしい犬のいろく

泥棒の番をせず其味方をする犬

犬には非常に澤山の種類がある。日本では犬と云へば泥棒の番をさせるとか狩獵に使ふとか大概相場が定つて居るやうだが西洋には随分珍らしいのが居る。

ラツチャアと云ふ種類の犬は性來泥棒心のある犬で泥棒の番どころか自分から泥棒を働かうと云ふのだから始末が悪い。殊に怪からぬのは甲乙二人の者が居る時ラツチャアは甲の人と乙の人とを嗅いで泥棒心の餘

計ある方の人へ従くと云ふ。處が或る西洋人がそんな事とは知らずラツチャア種の犬を飼つて居た。或晩其の家へ泥棒が入つて、手飼の兎を盗んで行つた。するに其晩から其の犬も何所へ行つたか姿を隠して了つた。「どうも不思議な事があれば有るものだ。まさか泥棒が犬迄も盗んで行つたのではあるまいが、それにしても役に立たぬ犬だ。」と不平をこぼして居た。

其後間もなく其西洋人が夜分用達しに出ると自分の家に居た犬が兎を啣へて行くのを見かけたから、益々不審に思つて、よく調べた處が、自分の飼つて居た犬はラツチャア種で、兎を盗んだ泥棒の味方になつて今では其の手下に使はれて居る事が分つたと云ふ事だ。

子守をする犬泥棒を捜す犬

併し、そんな不心得の犬は西洋でもラツチャア種に限る。又中には甚だ有益な犬もある。マスティフと云ふ種類は子守をする。つまり子供を乳母車か何かに入れて、其の番をさせて置くと、假令悪戯者や悪者が來て、子供を構はうとしても、それを追ひ拂つて了ふので西洋では之れを子守の代に使つて居る所がある。

又外國では警察署で罪人が逃げた時、之れを搜索のに盛んに犬を使ふ。一體人の足跡の臭ひは一時間以内は消えないものであるから、犬は其の間に罪人の足跡の臭ひを嗅いで其の所在を探し出すのである。此れはブロードハウンドと云ふ種類だ。

矢張外國の水上市警察で、主として水上の搜索に使つて居る犬がある。之れは譬へば投身をした者があつて其の死骸が分らぬと云ふやうな場合日本などでは其の投身した河なり海なりへ網を打つとか、棒で掻きまは

すとかするのであるが、此の犬を連れて来て其の水の上を泳がせると、直ぐ身投者の死骸のある所を嗅ぎ出すと云ふ。之れはニューフワンランドと云ふ種類である。

猫の代理をして鼠を捕る犬

フオツクステリアと云ふ種類の犬は猫のやうに鼠を捕る。體も大抵猫位の大さで尻尾は有るか無いか分らぬ程で、一寸見れば尻尾の根本から切られたかと思はれる。動作が非常に敏捷で、座敷や地上を走つて居る鼠ならば譯なく捕る。但だ猫のやうに曲つた鋭い爪がないので、樹や柱に登る事が出来ぬ。従つて天井裏の鼠などは捕る事が出来ない。此犬は日本によく飼つて居る狎のやうに座敷の上に飼つて置くものであるが、外國の或る所では田畑

の作物に害をする野鼠を捕らせる爲に飼つて居る。

此のフオツクステリアとは種類は異ふけれども、蒙古の犬も鼠を捕る事が巧妙いさうだ。

一體蒙古と云ふ處は遊牧の民がテントを張つて生活して居る處で、其の外には必ず色の黒い犬が番をして居る。一寸見た處では眞に鈍物で、一度眠つて居るやうだけれども、若し見馴れぬ人がテントの近くへ行かうものなら尻尾を巻いて噛みつくやうに激しく吠え立てる。其の時の形相は非常に物凄く、うっかりすると噛みつかれる。蒙古地方では人が死ぬと、死骸を山の上に運んで埋め、何もしないで棄てゆく。すると犬が寄り集つて其の肉を啖ひ荒すのである。だから山越でもしようものなら、山の頂近くには白骨が一面に散らばつて居るのを見る。そんな風で蒙古の犬は、人の肉の味を知つて居るから、知らぬ人さへ見れば嗅べたが

つて吠え立てるのだ。處が此犬も野鼠を捕るのが巧である。其の又野鼠は野原へ穴を掘つて棲つてゐるが、穴は二階家のやうに幾つもの階段が出来て居るし、穴と穴とを通じて互に往來する事も出来るし、非常に巧妙に出来て居る。而して其の鼠も中々敏捷であるから、犬には滅多に捕られぬけれども、どうかして自分の穴へ入る事を間違へたり、俄の物音に驚いて狼狽たりして居る處を追ひ詰められて、遂に獐猛な蒙古犬の餌食となるのだ。

財産や生命の保険に使はれる犬

アメリカあたりでは生命保険や財産保険に犬を使つて居る。夫れはどうか云ふ場合かと云ふに、彼地ではよく家族一同が旅行をするとか別荘へ行くとかして、其の家を明ける事がある。其の時留守宅の財産の番をする

る者がないと、犬の會社へ向つて財産保険を申込みるのである。すると犬の會社の方では、譬へば一萬圓の財産に就いて犬一疋二萬圓に就いて二疋と云ふやうに、犬を其の家に派出して、それにボーイ一人をつけて番をさせ、其の家の表口の所へ財産保険に入つて居ると云ふ札を張る。斯うして置けば、其の家の者は財産の全部を家に残して行つても萬一間違があれは、犬の會社から保険金を取る事が出来るので、安心して家を明けられる。會社の方では犬一疋に就いて幾らと云ふ手数料を受取るのである。

生命保険の方は、譬へば或る人が恐ろしい山でも越えなければならぬが、其山には猛獸が居て一人では通れないと云ふやうな時、會社へ生命保険を申込みば、犬を一疋なり二疋なり望むほど同行させる。そして其の犬が猛獸の來襲するのを防いで、其の人の生命を護るのである。之れはブ

ルドツクと云ふ種類で大層力の強い犬である。

日本などで獵犬として用ひて居るのは多くポインターと云ふ種類であるが、此犬は獵に連れて行くとき鳥や獸が近所に居る時は眼配せをして主人に知らせる。ポインター(指示す)と云ふ名も其の邊から起つたものであらう。

驚くべき智慧をもつたブードル犬

ブードルと云ふ種類には二通あつて、毛が割合に短いのを縮毛ブードル、毛が非常に長く繩暖簾のやうに絢れて垂れ下つて居るのを繩毛ブードルと云つて居る。尤も此の二通は種類の異つて居る譯ではなく、唯だ其の取扱ひ方によつて縮毛ともなり繩毛ともなるのださうだ。性質は犬の内でも最も伶俐で、物事を聞分ける力が非常に發達して居て

人が教へてやれば随分六ヶ敷い事でも直ぐ覺える。だから此犬は愛玩用として可愛がられる外、見世物によく出て居る。

見世物のブードル犬は様々の珍藝をやる。逆立梯子乗、玉乗等は朝飯前の事で、拳闘をやつたり、日本の猿芝居のやうに、自分が馬になり猿を乗せて競馬をやつたりする。嘗てロンドンにあつた見世物のブードルはトランプをやつた。それは二匹のブードルが向ひ合つて椅子に乗り、丁度人間がトランプをやる通りにしたさうである。其他時計の時間を見分けるとか、可成面倒な勘定をやるとか、其の伶俐な事には舌を巻かぬ者はない。

或る靴磨の飼つて居たブードル犬は、いつも主人の店を張つて居る所から半町許隔つた處に遊んで居て、人が來かゝると其の足許へ行つて其の人の靴を滅茶くくに汚して了ふ。通行人は何れもブツく小言を云ひ

珍らしい犬のいろく

ながら來かゝると、可い監梅にブードル犬の主人の靴磨を店が出して居るので、先刻の犬にそんな企があらうとは知らずに皆な其所で靴を磨かせるので大層儲かつたと云ふ事だ。

『どうだ、人間も跣足の智者ぢやないか。』と云つて叔父さんは今更のやうに感嘆した。

茸を掘る事の巧い茸犬

矢張り此のブードル犬の一種で茸犬と云ふのが居る。之れは茸狩の名人である。

西洋にはトラツフルと云ふ菌の一種があつて、彼地では丁度日本人が松露を掘つて食べるやうに、此のトラツフル茸を掘つて食べる。之れを掘るのに今云つた茸犬を使ふのであるが、豚も馴らせば此の犬の代りをす

るさうだ。

さて此の犬は白鼠黒等様々の色があるけれども白が目につき易くて便利だと云ふ事である。之れを馴らすのは、生れて四ヶ月目位から始め、最初は其の茸を投げてやつて拾ふ事を練習させ、次に茸の上へ少し土を掛けて置いて掘出させ、だん／＼其の土を深くして、遂には地の下二寸位の深さに埋めたものをも掘り出させる。それが巧く出来れば實際にも使はれると云ふ。

春もだん／＼暖くなると、土の中に冬籠して居た動物がノコ／＼出かける。蛙、蛇、蜥蜴、いろ／＼なもののがノコ／＼と出かける。『今日裏の田圃で小さい蛇が大きな蛙を呑むのを見たが、どうして蛇はあんな大きなものを丸呑にするんでせうね。』と太郎は例に依つて不審

珍らしい犬のいろ／＼

を叔父さんに持ちかけた。

動物中で一番大きく開く蛇の口

非常に大きく開く顎の構造

吾々人間などは、幾ら大きく口を開かうとしても一定の制限があつて拳位のものでさへ丸呑にする事は出来ない。處が蛇に限つて自分の胴の丸さよりも遙に大きな蛙とか鳥とか鼠と云ふやうなものを丸呑にする。其の口は一體どんな仕掛になつて居るだらうか。

蛇の顎は普通の動物とは大分其の構造が異つて居る。先づ上顎も下顎も左右兩半から成立ち、其の左右兩半は別々に動くやうになつて居る。且つ上顎の後には特別の骨が左右に一本宛あり、下顎の後の端と關節し

て居るので、口は非常に大きく開く。

殊に上下の顎の左右の兩半は極々ゆるく附着いてゐる、分けても下顎の兩半の間にはまるで護謨かなぞのやうに伸縮自在な膜があつて、若し大きな物を呑み込む時には兩半の骨が離れ、其の膜は伸びて驚く程大きく口が開く。此様な構造の顎は蛇類より外には持つたものが無い。

蛇の齒は餌を逃さぬ爲

口が大きく開く許では、大きな物を呑み込む事は出来ない。我々ならば、別に其の構造は無くても手があるから口へ物を持つて行つて噛む事が出来る。けれども蛇は手がないから、一旦啣へたら、それを放さないで、其まゝ呑み込む必要がある。で、蛇の口には細かい齒が澤山ある。そして皆な尖は奥の方を向いて居る。此の齒は吾々のやうに物を噛み碎く爲で

はなくて脚へた餌を取り逃さぬやうに確乎引止めて置く爲である。
 齒が奥へ向いて居るから、口へ指を入れて手前へ引出さうとすると齒に
 引かゝつて容易に出せないが、奥の方へ押しやるとスル／＼と譯もなく
 入る。で、蛇は餌となるもの、體の一部を脚へ上下の顎の左右兩半を交
 る／＼前後へ動かす。すると餌は少しつゝ奥に行くのである。丁度人
 間が手で繩を手繰るやうに蛇は顎で餌を咽喉の方へ手繰り込むのだ。
 餌が入るに従つて口は大きく開いて遂に呑み込んで了ふ。

兎など蛇に巻れると骨が折れる

蛇の大きいのは四間位のもあるし、小さいのは一尺に足らぬやうなものも
 居る。日本で普通見る青大將やまかやしなどは蛙小鳥鼠などの小動物
 を呑むが、熱帯地方に居る大きな蛇になると鹿位の大きな獸を丸呑にす

るさうだ。

嘗て赤棟蛇が大きな蛙を呑みかけて居るのを見つけ、それを吐出させて
 寸法を測つた處が、其の蛇の胴の直径は六分許りだつたのに呑まれた蛙
 は腹の處が二寸程あつた。之れに依て見れば、印度邊の大蛇は胴の直径
 が五六寸以上もあるから、餘程大きなものを呑むに相違ない。

蛇が蛙を呑む時には足の方から先に呑む。飛んで逃げられるのを恐れ
 るからであらう。獸類を呑む時には、先づ幾重にも其の長い體を餌に巻
 きつけ、十分に締め殺して置いて頭の方から呑み始める。兎の如きは餘
 り強く締め付けられるので、肢の骨など幾つにも折れて了つて、全身が綿
 のやうに軟かくなる。大きな餌を呑むには一二時間もかゝるが、其の代
 り其後一二ヶ月間は他の餌を食はないで居るのだ。

「蛇の口の話をしたから、序にもう少し蛇の話をしてしよう。」と云つて叔父さんは恐ろしい大蛇や毒蛇の話をした。

恐ろしい大蛇と毒蛇

野猪や鹿を平気で丸呑にする

神代の昔、稻田姫が八岐の大蛇に苦められ、既に吞まれかけた處を、素盞鳴尊が救つたと云ふ話を初め、日本には昔から大蛇の話が澤山ある。蛇は大きいのにしろ、小さいのにしろ、其の形が厭らしいもので、大概の人は之を嫌ふ。

日本には大きな蛇の話丈はあるが、実際には餘り大きなのは居ない。蛇の二三丈もあるやうなのが、出て人を吞んだと云ふ昔話は聞くが、古來

まだ一疋もそんな大きなのが捕へられた事がない。唯だ見たと云ふ事に止まつて居る。

併し熱帯地方に行くとなつて随分大きなのが居る。亞弗利加、濠洲、印度、馬來諸島等に居る處のバイソン一名にいさへびと云ふ大蛇は、實際其の長さ三丈位に達するものがある。野猪だの鹿だのは平気で丸呑にする。時には大牛でさへも巻殺して吞むと云ふ。人間も随分其の害を受けるさうだ。蛇皮線と云ふ鳴物は此の蛇の皮を張つて造るのである。

南亞米利加、中央亞米利加邊には長さ三丈餘に達し、其の胴の太さも肥つた人間の胴位ある大蛇が居る。力が強く、人畜類の害を被るものが多い。歐洲大陸に居る王蛇と云ふのも成長すれば三丈位になる大蛇である。併し前に云つたのは皆な毒を持つて居ないから、比較的害が少いけれども、毒蛇になると其の害もひどい。

咬み付かれると大概の動物は死ぬ

毒蛇の中で最も大いのは、印度や亞弗利加邊に多いアスピスと云ふのである。長さが八尺位迄になる。背中が黄色で腹になるに従つて薄黄色になり、處々に横紋のあるのが普通であるが色の變つたのも居る。舉動が迅速で不意に突進して來て噛みつく。其毒は非常に激烈で咬まれたものは大抵死んで了ふ程である。

次には印度に多いコブラと云ふのである。色は黄色を帯びた褐色で長さ六尺位になる。此の蛇も激しい毒をもつて居るが形の上で他のものと異つて居るのは、頭部は小さいけれども頸から胸に當る處を左右に幅廣く廣げる事が出來て、其れを背面から見ると左右に丁度眼鏡を掛けたやうに二つの圓い斑紋があり、其の腹部にもまた勾玉のやうな斑紋が付い

て居る事である。コブラは平常は此の特徴ある形を現はさないが、怒つて敵に向ふ時とか、他から攻撃されて自分の體を防禦する時とか、或は又音樂を聽いて愉快に感じた時とかには、十分其の胸の處を廣げる。而して全身の三分の一位を擡げて前の方に突き出す。之れに咬まれると大概の動物は死んで了ふ。印度支那の南部暹羅馬來半島、スンダ島、セイロン島、アフガニスタン、東北ベルシア等に居る。

お釋迦様に日掩をして上げた毒蛇

蛇は昔から神様であるとか、神様のお使者であるとか云つて、恐れ敬はれる。今日でも印度ではコブラが家に入つても追出さないうで食物を與つて之れを拜む。

それに就ては斯う云ふ傳説がある。昔お釋迦様が日中道を歩いて大層

お疲れになつたので、道傍の日光の赫々と當る處でお休みになつたが、其のうちつい眠くなつてウト／＼となされた。其處へコブラが出て来て、例の幅廣い胸の處を廣げてお釋迦様に翳して日光を遮つて上げたので、非常に可い氣持でお眠りになつた。お眼がさめた時お釋迦様は其の禮に何かコブラに遣らうと思はれたけれども、生憎何も持合せがなかつた。『では又其のうち折があつた時お禮をしよう。』と云つて其の時はお歸りになつた。

數年の後、鳶が澤山になつてコブラを捕つて食ふので、コブラ社會は大恐慌を引起した。其處で以前のコブラがお釋迦様の處へ行つて、『何時か頂く筈のお禮の代に、何とかして鳶が我／＼を傷めないようにして頂きたう御座います。』と嘆願した。此時お釋迦様はコブラに一つの眼鏡をやつて、之れを掛けて居れば鳶も恐れて近かないやうになると仰しやつ

た。コブラの背中に二つの斑紋があるのは、其時頂いた眼鏡である。併し、之れは要するにお伽噺の類で、實際の事では無論ないが、之れを見ても兎に角、蛇が一方では嫌はれながらも一方では宗教的に敬はれると云ふ事が分る。日本でも出雲國の神社に近い海に居る海蛇が、神様のお使者だと云はれたり、辨天様のお使者が白蛇だと云はれたりする。またまだ斯う云ふ例は日本にも外國にも澤山ある。

尻尾の響で敵を近寄せぬガラ／＼蛇

アフリカの沙地には角蝮と云つて、頭部に二本の角のやうなものが出た毒蛇が居る。長さは二尺六七寸位にもなる。他の毒蛇と等しく頬の處が膨れてゐる。晝は沙の中に潜り込み頭部丈上に出して居て、小鳥などを捕つて呑む。夜になるとノソリ／＼這ひ出して多數集つて居るのを

見かける。又亞米利加にはガラ／＼蛇と云ふのが居る。之れは尻尾の先に幾つも環のやうな堅い皮が着いて居て、之れを振るとカサ／＼と云ふ音がする。其處で其の名も附けられたのであらう。矢張り一種の毒蛇で、其の音響を發する尻尾はどう云ふ効用のあるものかと云ふに、つまり「此所に毒を持つた恐ろしい蛇が居るから、餘り近寄らないやうに用心しろ。」と云ふ代りに其の尻尾を振り立てるのである。格闘をして敵を斃すよりも、成る可くならば格闘も何もしないで、初から敵を近づかせない方が好都合である。殊に格闘をすると、時には自分が負かされるやうな強敵がないとも限らぬ。だから尻尾の響で大敵も小敵も追拂つた方が非常に安全である。ガラ／＼蛇は斯う云ふ理窟を知つて居て其尾を鳴すのではないが、結果はつまり今云つたやうになるのだ。

昆虫類の中で蜂の體に黄色の條があつて他の昆虫と區別する事の容易なものも、蝮の斑紋が美しくして他の動物の目に付き易いのも、要するに理窟はガラ／＼蛇の場合と同じい。「此所に居るぞ、恐ろしい刺鍼をもつたもの、激しい毒を持つたものが、此所に居るぞ、近寄るな。」と云ふ事を色や模様で示すのである。之れは「動物の保護色」の一種で警戒色と云ふべきものである。

「よい機會だから蛇の話が濟んだら、保護色の話をしよう。」

ハブの爲めに非常な害を被る沖繩人

日本の毒蛇と云へば内地では蝮位のものであるが、沖繩列島に棲んで居るハブの人間や家畜に及ぼす害は、中々ひどくて蝮などの比ではない。

恐ろしい大蛇と毒蛇

其處で、沖繩縣廳では年々巨額の金をかけて、ハブの撲滅を計つて居る。即ち住民はハブの頭や其卵を捕つて縣廳に持つて行くと、ハブの頭幾ら卵幾らと値段を定めて買上げて貰ふのである。斯くして一年に縣廳に集つて來るハブの頭は八千五百から九千六七百に達する。けれどもハブは依然として跋扈つて居る。

さて其の被害はどうかと云ふに、沖繩縣下では年々百人足らずの人間が咬傷を被り、鹿兒島縣下の大島徳の島では年々三百人足らずの住民が傷付けられる。而してハブに咬みつかれると、死ぬか、一生片輪になるか、夫れまで激しくなくても、傷の治る迄は仕事を休まねばならぬ。之れは目に見える被害であるが、此の外に目に見えぬ被害も莫大なるものである。先づ大島のやうな熱い處では、朝とか夕とかの涼しい時を利用して仕事をせねばならぬのに、ハブに食ひつかれる恐れがあるから、朝早くから夜

遅く迄外で働く譯に行かぬ。従つて同地方の農業や交通を初め、其他文化の普及事業の發展と云ふやうな事も自然他の地方に遅れるのである。殊にハブに就て困る事は、深山幽谷と云ふやうな人の稀なところには餘り居ないで却つて人里近く棲んで居る事である。畑地や人家の納屋や石垣などをニヨロくと這ひまはつて居る。それは食物が人家の附近に多いからで、ハブの方から云へば深山幽谷では餓死せねばならぬから、勢ひ人里近くに棲む事となる。其の食物は鼠だの鶏の雛だの、卵だのと云ふやうなもので、甘蔗の收穫時には鼠が野原に居るから、ハブも夫れを追うて野に居るけれども、收穫が濟んで鼠が人家へ入込むやうになれば、ハブも亦それを追驅けて人家に來る。ハブと鼠とは非常に深い關係があつて、一面から云ふと、ハブの多いのは鼠の多い爲であり、鼠の多いのは甘蔗や甘藷の多い爲めである。だから

ハブを撲滅しようと思へば先づ鼠を撲滅しなければならぬ。鼠を撲滅するには甘蔗や甘藷を絶やさねばならぬと云ふ事になる。併し、それでは人間が困るから、どうかしてハブばかり若しくはハブと鼠と丈けを撲滅する策はないかと研究して居る。其の結果鼠や蛇を巧みに捕へ、殊に蛇の卵を捜して食ふので有名な印度のマンガースと云ふ動物を輸入して、ハブや其の卵を捕つて食はせる事になつたのは、既に數年前の事である。

「蛇の話は餘り長くなつたから、之れ位で切上げよう。さて、此次は何を話さう。」と叔父さんは首を傾げて思案した。

「叔父さん、もう忘れたの、先刻蛇の話の次に保護色の話をしてやると云つたでせう。」と太郎に注意されて、今度の日曜には其の話をする

約束が成立つた。

攻撃の保護色と防禦の保護色

雨蛙は木の葉の色、水水母は水の色

動物の保護色と云ふ事は、珍らしい話ではないけれども、動物を研究するには是非知つて居らねばならぬ。

之れを一口で云つて見ると「動物が自分を保護する爲に、自分の體軀の色を其の棲息つて居る處の周圍の事物の色に似せて居る事」である。例を擧げて見ると、樹の葉に棲んで居る雨蛙の色は緑色で、土中に棲んで居る蟻は灰褐色であるなどが即ち之れである。雨蛙は木の葉の色と同じいから、一寸と見ても何所に居るのか分らぬ。そこで鳥などに食はれない

で済む。又墓も其の通で土の色に似て居るから、土塊が轉がつて居ると紛れて、敵の目を免れる事が出来る。

保護色にも種々あつて、桑の尺蠖のやうに其の棲んで居る桑の樹の枝のやうな外形と色彩とを持つて居るものもあれば、又海洋に浮游んで居る水母のやうに、外形は他のものに似せないで、唯だ色彩だけが水色で、海洋の色と紛れるものもある。

そこで、同じ保護色の中でも、桑の尺蠖のやうに、色も形も兩方が桑の枝に似るものと、水母のやうに唯だ色だけ他のものに似るものとの二種がある。木の葉蝶が木の枝にとまると其の翅の模様と形とで、丁度枝に附着いた葉のやうである。即ち之れも外形と色彩とが他物に似た例である。尺蠖や木の葉蝶の様に其の形を他の物に似せるものは、之れを擬態と云はれて居る。

南亞米利加に産する斑驢には黒い條と白い條とが體軀一面に丁度縞の着物を着たやうに模様をつけて居るから、斑驢だけ引出して見ると非常によく目立つけれども、之れも實は保護色なので、大きな葎類の植物が茂つて居る間に居る時には、容易に斑驢の居るのが識別せられぬ。

虎の毛皮の斑紋は藪の中に日光の射した影に似たので、藪の中に居る虎は容易に識別せられぬ。即ちあの美しい虎の皮の模様も保護色なのである。獅子は灰緑色の色をして居るので、熱帯地方の平原の色と紛れる。北極熊は白いから雪や氷の積つた周囲の色と紛れる。何れも保護色である。

併し、水母にしる、斑驢にしる、又虎や獅子や白熊にしる、尺蠖や木の葉蝶とは異つて形は何物にも似ないで唯だ色だけが周囲に似て居る。之等は單に保護色と云ふものゝ好い例である。

獅子は沙漠の色 白熊は雪の色

八八

前に述べた中で虎だの獅子だの白熊だのは、周囲の色に紛らして敵の目を免れようと云ふのではなく、他の動物を襲撃する場合に、自分の存在を先方に知らせないで、不意に飛びかゝる爲めである。云はゞ攻撃の保護色である。

之に反して雨蛙だの水母だのと云ふやうなものは、敵の目を免れやう爲の保護色云はゞ防禦の保護色である。始終土の中に住んで居る螻蛄と云ふ蟲が全身殆んど黒褐色で土色と紛れるのも、草原や木の間に棲んで居る馬追蟲が翅は緑色で、肢に斑紋があつて腹の一部が黄色で、よく周囲の色彩と紛れるのも敵を攻撃する爲の保護色ではなく、何れも防禦の保護色である。

次に、保護色の一種であるが、前に云つたものとは其の趣を異にし、周囲の色彩とはまるで反對の色又は鮮明な、よく區別の出来る色、ギラ／＼光つてよく目立つ色をもつたものが居る。毒蛇の話の時に一寸云つた蝮とか黄蜂とかは此の部類に入るものだ。

之等のものは、自分の所在を他の動物に知らせて、自分は此所に居るから近づくな。と警告して居るのである。併し、何故近づいてはならぬかと云へば、蝮ならば毒のある牙で咬まれるし、黄蜂ならば毒のある刺鍼で刺されるからである。そんな風で、目立つ色彩をもつたものは、一方に何か他の動物に厭がられ、或は恐れられる仕掛なり道具なりを持つて居なくてはならぬ。

鍍金の黄蜂と天麩羅の蝮

攻撃の保護色と防禦の保護色

八九

龜蟲は金緑色の頗る綺麗な動物だけれども臭い液を分泌からこれに近寄るものがない。又ていはいむしも立派な斑紋があつてよく目立つけれども臭い香がするので鳥も之れを食べる氣にならぬと見える。毛蟲や芋蟲も矢張其の姿はよく見えるやうに出來て居るが味が悪いので之れを取つて食ふものがない。

之等のものは自分の色で他のものを威嚇し警告してゐる。だから此等を警戒色と云ふことは前に話した通りである。だから、此等處が茲に面白い事がある。それは警戒色を持つたものが他の動物に厭

がられたり恐れられたりして、害を被らないのを見て、其の彩色だけを真似たものがある。併し、それは單に色だけ真似たのであるから、實際厭がられるやうな悪臭もなければ、恐れられるやうな刺鍼や毒を持つて居ないのである。

黄蜂の真似をした虻の真似をした蛇などが此の好い例である。つまり其の虻は鍍金の黄蜂で、其の蛇は天獄羅の虻なのである。

「人間にもよく斯う云ふ輩が居るよ。實際金もない癖に、無暗とキラキキしたものを身につけて金持振つたり、碌に學問もないのに厭に六ヶ敷い事を云つて學者振つたりする、所謂メツキの金持、テンブラの學者が居る。滑稽だね。」と云つて叔父さんは呵々と笑つた。

「今のお話は何だか理窟ぼくて面白くなかつたから、此の次にはもつと分り易いお話をして頂戴。」と花子が注文した。

「御挨拶だね、人が一生懸命になつて分り易いやうに話して上げたのに、面白くなかつたからもつと分り易いのをと云ふ。どうも怪しからん事を云ふ。」と叔父さんは笑ひながら怒つて居たが、直ぐと機嫌

を直して「ちや今度は方面を變へて、海に棲んでゐる動物の話」を少し爲て見よう。」

油断した爲退化した鯨の體

魚類と思はれるのも無理はない

鯨は海に棲んで居る動物中の一番大きいものであるばかりでなく、實に世界中の最も大きな動物である。さて鯨にもいろいろ種類があるが、其中背美鯨と云ふのは長さ九丈に達し、眞甲鯨と云ふのは長さ七八丈に達する。

鯨は元來陸地に棲んで居た。而して牛や馬や犬や猫のやうに其の先祖には體に毛が生え、四本肢で陸上を歩き、乳を飲んで育つたものである。

處が何時の程からか水の中へ入るやうになり、次第水に馴れて來るに従つて體も水中に生活するやうに變つて行つた。今日では殆んど全く魚の形をして居るのである。されば支那でも魚と思つて「鯨魚」と云つて居た。又西洋でも近世まで魚と思はれて居た。

成る程魚類と思はれるのも無理はない。先づ第一に全身に毛がなくて魚のやうに滑らかである。次に獸類には必らずある頸部が鯨に限つて全然見えない。又如何な獸でも頭の先に鼻があるのに、鯨には之れが見えないし、又耳も見えない。且つ前肢は胸部の兩側にあつて、魚類の胸鰭の形をして居る。而して後肢は外面には顯はれて居ないが、解剖して見ると肉の内部に其の小さい痕跡がある。そして其の尾の形を初め、凡ての點が魚に非常によく似て居る。魚だと思はれても仕方はないのだ。處が其の體内を検べて見ると、肺臓が胸部に在つて、空氣を呼吸する。血

油断した爲退化した鯨の體

液は暖かく體腔は胸部と腹部との二つに區別され子が産れると乳を飲
ませて育てるのだ。之れでも魚類であらうか。
魚類でないのに、如何云ふ譯で外形が魚のやうになつたのであらう。

大洋を大威張で泳ぎ廻つて居る

先づ皮の下へ脂肪が澤山出来て、體腔が軽くなり水に浮くやうになつた。
又脂肪が毛の役目を勤めて寒さを防で居るから毛が無くなつて了つた。
鼻の孔も水中に居て空気を呼吸するには前方に着いて居るよりも頭の
上に着いて居る方が便利である。と云ふのは、若し頭の前に着いて居た
ならば呼吸をする毎に、頭を擡げて水の上に出さねばならぬ。けれども
上部に着いて居るので、體腔を浮かせて、少し頭部を水面に現はせば呼吸
が出来るのである。

さて、前にも云つたやうに世界中の一番大きな動物であるから、力も從つ
て強く、之れに抵抗ふ動物は滅多にない。即ち天下無敵、世界無敵である。
大洋の中で大手を振つて威張つて遊びで居ても平氣である。従つて武
器の必要がないから、鋭い爪もなければ牙もなく、又角のやうなものもな
い。併し、さかまたと云ふ種類は鋭い齒をもつてゐるが、之れは例外であ
る。

眼も耳も鼻も皆な利かない

一體、動物の體腔は、必要な部分は益々發達し、必要がない部分はだんぐ
小さく萎縮する、即ち退化する。鯨は眼を働かせて敵の襲ふのを見出した
り、耳を働かせて聞きつけたり、又は鼻で嗅ぎつけたりする必要がない。
唯だ威張つて泳ぎまはつて居れば、別に骨を折らずに食物も得られ、敵に

も害を被らぬ。そこで眼や耳や鼻などの器官は必要が無いので、次第に退化を始めた。今日では、鯨の眼や耳や鼻はもうあまり役に立たなくなつた。

然るに、人間と云ふ大敵が現はれて、大砲などを撃つて打殺す。斯うなつては鯨も餘り威張つては居られない。若し眼が利けば人間が汽船に乗つて來るのを、遠くから見出して逃げる事も出来る。耳が利けば仲間の鯨の大砲で撃たれる音を聞いて、危険な場所から逃げ去る事も出来る。鼻で物の香を嗅ぐ事が出来ても大に助かるのであるが、之等の器官は、さう急には進化して役に立つやうになるとも思はれぬから、遂には人間と云ふ大敵に滅ぼされて了ふのであらう。

「鯨は海の中に居るけれども、魚類でないと云ふ事は今話したが、之れ

から少しほんとうの魚類の話をしやう。」と叔父さんは色々な魚類の繪や寫眞を取出した。

魚類の體の觀察

日本に産する魚の種類が一千二百餘種

我々は毎日一度位お魚を食べない事はない。日本は四面海で圍まれた國であるから、魚の種類も多く、漁業も中々盛んである。併し、日本人は一體に物を研究するとか、精しく觀察するとか云ふ事を餘りしないから、毎日食べる魚に就ても知識が至つて乏しい。

だが、茲には小六が敷い魚の研究や觀察を話さうと云ふのではない。さて、今日迄世界各地で知られて居る魚の種類は一萬五千以上もある。

日本の近海及び河や湖に産するもの丈でも千二百餘種ばかりあると云ふ。其の澤山の種類の魚は大概食べられるけれども中には毒があつて人が食べると中毒を起し甚だしきは死ぬ事さへある。河豚は食ひ度し命は惜しと云ふ川柳があるがつまり之れは河豚の卵巣に毒があつて、うっかり食べると死ぬからである。又カサゴだの、オコゼだの、メバルだのミノカサゴだの、ゴンズイだの、ギギだのと云ふ魚は其の鱗に棘をもつて居て刺すのである。日本などでもよく獲れるアカエヒの尾には、非常に鋭い棘が付いて居て、之れに刺されると其の局部は腐つて了ふと云ふので漁夫は大層恐れて居る。

如何云ふ譯で毒を持つて居たり棘を持つて居たりするかと云ふに、つまり他の動物から攻撃されぬやうにして、自分の種族を繁殖さうと云ふのである。ウツボ、アナゴなどが咬み付くのも矢張り目的は同じい。

側線は魚類に丈ある器官

魚を取上げてよく検べると、體の兩側の一列の鱗に穴が通つて、點線を引いたやうになつて居るのを見る。之れは魚の側線と云ふもので、ただ魚だけに於ける特別の器官である。此の側線の鱗には特別の神経が傳はつて居て、水中に起つた或る一種の波動を逸早く感ずる事が出来る。

魚の耳や鼻や眼は何れも極めて能力の鈍いもので、陸上の高等動物、譬へば鳥類や獸類に比べたならば、お話にならぬ。鼻や耳は兎に角眼は随分其の形も構造も發達して居るやうだから、相當に見えるだらうと思はれるけれども、眼前の物を瞭乎見る事は出来ず、唯だ物體の運動や輪廓や明暗の度や物が尖つてゐるか滑つこいかと云ふやうな事を見分ける丈けである。此の不完全な感覺を補ふ爲に、前に云つた側線と云ふ特別の器

官があるのだ。

身軽に浮いたり沈んだりする器官

魚が水の中で遊んでゐる處を見るのに、餘り體軀を動かさないうで深い處へ行つたり又淺い處に浮いたり至つて身軽に動く。併し人が泳いでゐる時水中に深く入つたり又深い處から浮き上るのには非常に手足を使はなければならぬ。斯く魚の動作の自由自在なのは何故であるか。之れは魚の體内に浮いたり沈んだりする爲の器官が備つて居るからである。其の器官とは即ち鰾である。大概の魚を料理すると腹から瓦斯體の入つた大きな囊が出て来る。それが鰾である。鰾は咽喉と通じて居て、絶えず空氣が出入するやうになつて居る。中には其の通路のないものもあるが、囊の中には一種の瓦斯が入つて居る。

此の鰾がある爲に魚の體は軽くなるけれども、其の中に瓦斯の容積が始終同じかつたならば、魚の躰重も同一であつて浮いたり沈んだりするには何の役にも立たぬ。處が鰾の周圍には厚い筋肉がついて居て、其の筋肉が伸びたり縮んだりする毎に鰾も大きくなつたり小さくなつたりし、其の結果軀の比重を變へる事が出する。

奇抜な魚と風變りな魚

木に登る魚、喧嘩をする魚

此の魚は實際木に登るのである。出來得べからざる事をば、木に縁つて

奇抜な魚と風變りな魚

魚を求むるが如し。」と云ふけれども、此魚は木に縁つて求める事が出来るから、此言葉も當てにはならない。此の言葉はまだ之れを知らない人の口から出たに相違ない。然し木に登ると云つても猿のやうにスラスラと木に登るのではない。唯だ水をはなれて水邊の低い草や木に登る位のものである。熱帯地方にゐるアナバスサイアンデスとか日本のトビハゼとかは此の例である。

木に登る魚も奇抜であるが、喧嘩する魚も亦珍らしい。此の喧嘩魚は印度地方や我琉球邊にも居る。暹羅では之れを日本で金魚を飼ふやうに飼つて置いて、其の喧嘩するのを見て楽しむ風がある。此の魚は同種類の雄と雄とが集まると、直ぐ怒り出して、鰭を張り、體の色を變へて互に打突り合ふのである。此魚が喧嘩を初めると其鱗は紅だの緑だの青だの金だの様々な美しい色彩を現はす。人間にも怒ると青くなつたり赤くな

つたりする者があるが、動物にも喧嘩魚のやうなのがあるのは面白い。又魚は水中を游泳いばかり居るものと思ふ人には、躰魚が水の底を匍匐たり飛鯊が干潮の時に地上を這ひまはつたり、飛魚が水中から飛出して空中を飛翔たりするのは不思議に思はれるに相違ない。

觸手で他の魚を近寄せてバクツク魚

人が魚を釣つたり鳥を捕つたりするやうに、魚の中にも釣をするものがある。鮫鱈と云ふ魚が即ち之れである。

鮫鱈は魚屋の店先にもよく吊してある魚で、大層お腹が膨れて居るから、其の臍を皆な取去り、皮を乾かして提灯を拵へることが出来る。

此の魚は深い海に住み、體の色が濃黒であるが、頭部の上に長い鞭のやうな觸鬚があつて、其の先が廣くなつて居る。鮫鱈は靜かに此の觸鬚を振

つて居ると小さい魚類が夫れを餌だと思つて、諸方から集つて來るのである。すると鮫鱈は丁度其の下に大きな口を開いて居て、寄つて來た小魚をバクリくと呑んで了ふ。ハナオコゼだの筧魚だのも小形ではあるが鮫鱈に似た魚である。

仔魚を大事にして育てる魚

普通の魚は卵を産めば、其のまゝ卵を放任つ置いて去つて了ふ。親と子との間に少しも愛情と云ふものはないが、中には親魚が仔魚を愛し慈んで之れを育てるものもある。タツノオトシゴだの、ウミテンダだの、イトウ

イトウは川の中に巢を作り、雌が卵を産みつけると、雄が來て之れを保護して育て上げるのである。又、タツノオトシゴの類は雌が卵を産むと

雄が自分の腹部に在る哺乳囊の中へ取り入れ、大事にして育て上げる。中には雌自身で其の卵を育てるものもある。卵から孵つた子は、普通親魚と同じ形をして居るが、中には親と子と非常に異ふものがある。鰻マンボウなどは此の例である。中でもマンボウは其の子供の時には割合に普通の魚の形に似て居るが、だんく成長するに従つて、軀幹が縮んで頭部ばかり發達するので、まるで頭だけが泳いで居るやうに見える。

深い海の魚は皆な眼が悪い

同じ海に棲んで居るものでも、極々深い處に棲むものと、さうでないものとでは大分異つたところがある。

太陽の熱は百五十尋一尋は六呎以上の海中には達しない。光線はもつ

と下まで届くが、三百尋から五百尋以上になると、光も極く僅しか達しない。いで九百尋からになると少しも届かない。而して二三百尋以上になると、植物が些少もない。唯だ動物が棲んで居る許りである。其の動物の特徴とも云ふべきは第一に眼の發達して居ない事で、何うかすると全く眼の無いものが居る。さうでない迄も形が小さくて役に立たないものが多く、バラトロノスと云ふ動物は眼のあるべきところに金屬性の光つた皿のやうなものが着いてゐる。陸上でも洞の中などに棲んで居るものは眼が不完全である。之れはつまり光線の無い處であるから、完全な眼があつても見る事が出来ぬ。そこで眼が退化して了つたのである。其の代り他の感覺が一層鋭くなつたものがある。丁度盲人が眼の見えない代りに耳とか手先とかが人一倍發達するのと同じ事である。深い

海に棲む或る種類の海老などは、觸鬚の長さが體長の四五倍もあると云ふ。之等は眼の代りに他の感官が異常の發達をした例である。

紅や青や銀の光を發する深海の魚

又深海に棲む動物の特徴として全身或は其の一部分から光を發するものがある。極簡單なものは體から粘液を出し、それがピカ／＼光るやうなものがある。或種類の烏賊には體にボツ／＼した發光器があつて、其所から盛んに光を發するのであるが、之等の動物の放つ光には紅い光もあり、青い光もあり又眞珠のやうに銀色のものもある。

光線の少しも達しない深海で斯う云ふ様々の光を發するのであるから、視力の弱い動物の目にも附き易い。或人は之等の光は敵を威嚇するものであると云つて居るが、夫れと反對に餌にする動物を引寄せると爲のもの

ではあるまいか。殊に前にも一寸云つた鮫鯨の中の提灯鮫鯨と呼ぶものは釣をする鞭の先に発光器を備へて居て、ピカリ／＼と光らすから之れを慕つて様々の小動物が寄つて來るのだ。

何しろ光を發する之等の動物の居る處は深海で、全く眼の無いもの或は不完全なもの、多い中であるから、之等提灯を持つてゐる動物は、何彼に就けて餘程得をするだらうと想像される。

他の動物に電氣をかける魚

發光器をもつたものも面白いが、茲に又電氣を發する器官を備へたものが居る。

日本の近海に産するエヒの類で、シビレエヒと云ふのが有るが、之れは體の兩側に大きな發電器を持つて居て、其所に觸ると電氣に感じてビリツ

とする。

此の他發電器を持つたもので有名なのは、南亞米利加に産する電氣鰻である。其の電氣は非常に強くて、之れに觸れると馬でさへ驚いて騒ぎ出す程である。一體之等の電氣を持つた動物は、何の爲に其の電氣を使ふかと云ふに、電氣燈を點ける爲でも器械を廻轉す爲でもない、他の動物に其の電氣をかけて動けなくして置いて餌食とするのだと云ふ。實に都合の好い器官ではないか。

香魚や金魚は外國にも居る

我國の海岸附近や川の中に住んで居る魚類で、外國に見られぬものがある。マツカサウラなどが此の例である。

マツカサウラは海岸に近い海水の中に棲み、一寸見たところ鯛に似てし

かも鱈や鱈を初め珍らしい形をして居るが、日本には普通何處でも見られる魚である。次にアユは尙一層普通の魚で、日本國中の主なる川には屹度居る魚である。臺灣にも朝鮮にも北海道にもアユは居るのである。併し、外國には決して産しないと思つて居る人が多いが、實際は日本に限つた者でない、日本人は此のアユの美味に就て大に鼻を高くする事が出来ぬ。又我々が夏分硝子の器物に入れ軒に吊して楽しむ金魚や、子供が清で掬つて喜ぶ赤いメダカも亦日本特産の魚で外國には居ないと思ふ人もあるが金魚は元と支那から輸入したものである。

魚の話は大分長くなつたから、一先づ之れで終りとして、又思ひ出した面白い事があれば話す事にしよう。」と叔父さんは一服するのであつた。

二三日過ぎた或る朝であつた。前の晩勝手の棚に掛けて置いた鼠

落に、大きな鼠がかゝつて居る。太郎は大騒ぎをして之れを殺した。『今日は鼠の話をして頂戴』と、花子はお縁へ其の死んだ鼠を持出して叔父さんに頼んだ。

三年目に二千萬疋になる鼠

鼠算は縁起が悪いがベストは悪い

鼠は福の神の大黒さんのお使者だと云はれ以前の一圓紙幣には大黒天が俵の上に坐つて居る傍に鼠が二三疋居る繪が刷込んであつた。其他、鼠算と云つて鼠は繁殖の早いもの、お金も鼠算で増えるやうにと商賣人は御幣を擔ぐ。そんな風で昔から鼠は縁起の悪い動物であつた。處が、近年になつて恐ろしいベスト病が流行して、其の病毒を傳播るものは鼠

であると云ふ事になつた。さア猫を飼ふ鼠を買ひ上げる、大變な騒ぎになつた。大黒さんも鼠算もあつたものか、ドシ〜殺して了はねば人間

の生命が危険いと云ふ譯である。さて鼠は繁殖が早いと云ふが、どんな割合で殖えるのであるか、米國のラ
ンツと云ふ人の調べた處に依ると、先づ野鼠は温帯地方なら一年に三回
或は五回子を産む。妊娠してから僅か三週間も経てばお産をする。一
回に六頭から多い時には二十頭位も産む。生れた仔鼠は三ヶ月で又妊
娠するやうになる。

今、少くとも一年に三回お産をし、一回に十頭の仔を産むとして、一夫婦の
鼠が三年目には實に二千〇十五萬五千三百九十二頭になる計算である。
併し之れは一頭も病氣になつたり死んだり其他の障害を受けなかつた
場合の事であるが、いろいろの原因で前に云つた程は繁殖しなからう。

けれども食物が多くて敵の害がなければ、三年間に二千萬頭位にはなる
であらう。

毎日學校へ行く前に鼠狩

農業地では何所でも此の鼠の害を被るが、日本では分けても沖繩縣が甚
い。害を被るのは甘蔗豆甘藷米麥などであるが、分けても著しい損害を
受けるのは甘蔗だといふ。

其の地方へ行つて見ると畑路などには到る處に鼠の穴があつて、何疋も
〜ピヨコ〜飛び廻つて居る。小學校の生徒などは學校へ行く前に
は手ん手に棒を持つて甘蔗畑の間を歩きまはつて見つけ次第に鼠を叩
き殺し、夫れを村役場へ持つて行つて買つて貰ふのである。村役場では
持つて來た鼠の尻尾丈を切取つて貯て置いて、年に二度宛各村で捕へた

鼠の尻尾の数を比べる。而して数の多い村には賞を與へ、餘り少ないものは罰すると云ふ規則になつて居る。捕れた鼠の多寡を競争するのだから、其地方では之れを鼠勝負と云つて居る。

田圃で蛙が鳴き出した。太郎は學校から歸るとお友達と日の暮れる迄田圃で遊んで居たが、其夜叔父さんに朝鮮の蛙の話聞いた。

蝾螈のやうな腹の毒蛙

腹を前の方へ出してウンと反る

朝鮮には長さ一寸から一寸五分位の普通の蛙に似た動物が居る。洋杖で其の背中を一寸突くと、體を出来るだけ平たくし、頭と四肢とを後の方に引きつけ、腹をビヨントと前の方に出して體をうんと反らせる。どうも滑稽な形である。もう一度突いてやると又反る、又突くと又反る。幾度も突くと蛙の方が閉口してじつとした儘動かなくなる。夫れでも構はず尚ほ突いてやると、今度は到底叶はぬとも思ふのか、逃げ出すのである。

一體此の蛙はどう云ふ譯でそんなに反り返つて腹を突出して見せるか。よく見ると其腹には一面に黒い斑紋があつて斑紋の間は濃い赤黄色を呈し、まるで蝾螈の腹のやうであるが、此の動物は其目立つ色の腹を他の動物に示せて「此處に危険な動物がある、ウツカリ間違へて食べてはならぬぞ。」と警告して居るのだ。つまり前掲の「保護色」の處で話したやうに此の動物は警戒色をもつて居るのである。此種の彩色を有つて居るものは、一方に危険な武器譬へば毒とか悪臭と

か刺鍼とかを有つて居る事も前に云つて置いた。それならば此の蛙は一方にどんな武器を有つて居るか。

皮膚からは非常に激しい毒を出す

此動物はボンピナと云つて蛙の一種である。日光が大嫌ひで、始終草葉の蔭や穴のやうな處に棲んで居る。水の中へ入る事が大層好で鼻の端と眼玉とを水の上に出して、體軀を水の中に浸し、ブランと懸泳する有様は、まるで雨蛙や殿様蛙と同じやうである。それが棒で突くと直ぐに水の下へ潜り込んで了ふ。

ボンピナは日中は大概じつとして居る。鳴く事もあるが、餘り鳴かない。處が夕方から夜に入ると、急に生々して活動し始める。夜の中でも分けて月の夜を好むと見えて、最も盛に活動し、又最もよく鳴くのは月夜である。

又雨の降る時によく出て來る。

さて此の蛙が前に話したやうな警戒色を有つて居るのは、つまり一面に非常に激しい毒を含んだ牛乳のやうな液を皮膚から分泌からである。之れを食つたが最後、大抵の動物は死んで了ふ。そこでボンピナは一方によく目立つ色の腹を出して他の動物を威嚇するのである。

鰐魚でさへも恐れて食べない

此の蛙の種類は凡て四通あつて、歐羅巴に二種、東洋に二種あるとの事である。嘗て或る西洋人が歐羅巴に居るボンピナを捕へて、龜や蛇や鰐魚と同じ容器に置いて試験して見た。處が此の蛙は龜にも蛇にも鰐魚にも食はれなかつた。其後普通の蛙や蝶蛭を捕へて之等の動物と一緒に置いたら直ぐに食はれて了つたと云ふ。又或時は龜が水中でボンピナ

を見出して追ひかけて行つたが、一旦ボンビナの臭を嗅ぐと直ぐ退いて了つて以來決して此の蛙の傍に寄らなかつたと云ふ。龜や蛇や鰐魚が食はないのを見ても、ボンビナの毒の如何に激しいかが分るではないか。ボンビナは毎年五月頃卵を産む。卵が孵ると蝸斗になり次第に成長して變態し、遂に蛙となる順序は普通の蛙と變らぬが、十分成熟して腹の彩色がスツカリ出來上るのは孵化してから三年目である。

「同じ蛙の中にも、一方には鰐魚でさへ食べ得ないやうな恐ろしい奴があると思へば、一方には又人間が甘味くてく頬ベタが落ちるやうだと云つて賞玩するものもある。蛙の話の序に今度は食用蛙の事を話さう。」と叔父さんが云へば

「蛙は食べられるんですか、へえ。」と太郎は驚いた。

佛蘭西人の喜んで食べる蛙

日本でも赤蛙は薬として食ふ

蛙を食べると云つても、別に驚く事はない。日本でも昔から赤蛙は小兒の蟲の薬だと云つて、よく食はせる處がある。併し、それは唯だ薬として食ふに止まつて、魚や獸肉のやうに御馳走として料理の献立に入れると云ふ譯ではない。

處が佛蘭西人は此の蛙を中々の珍味として喜んで食ふ。其處で英吉利人は佛蘭西人の事を「彼人は蛙食ひだ」と綽名して居るとの事だ。さて此食用蛙は何所に棲んで居るかと云へば、佛蘭西のローギユ地方やヴワンデー方面であるが、一體其の地方は低い土地で、到る處の田畑には疏水

が通つて居る。土地の百姓共は其處へ船を浮かべ大きな竿を操つて水上を往來するのである。其の水道には何所でも蛙が澤山寄り集つて、ビョコ／＼飛びまはつて居る。中には人の拳位の大きさのものもある。何れも肥え太つて如何にも甘味さうな色をしてゐる。それが夕方になるとギヤア／＼と妙な聲を出して鳴き立てるので、非常に喧しいと云ふ。これが即ちハリ／＼人の喜んで食べる蛙である。

蛙狩専門の漁夫が居る

如何して此の蛙を捕へるか。其の地方には蛙狩を専門にしてゐる漁夫が居るが、彼等は河端の柳の木蔭などに隠れて弾力のある釣竿を振りまはしながら、蛙の水面に顔を出すのを待つて居る。やがて蛙がヒヨイと

浮き上つて息を吸はうとする時を目標に、釣竿の先につけた毛の小さい塊をそつと突きつける。それが如何にも甘味さうに蛙の眼に見えるので、ヒヨイと飛びつく。すると餌の中に包まれた釣竿の先に腮をかけられてプランと竿の先に垂下る。漁夫は占めたと云ふので、それを籠の中に取りつて入れる。

其他、網で捕へる方法もあるが、夜間は火釣と云ふ方法を用ひる。先づ提灯を點すか或は薪の束を河岸で燃やすと、其光を見て蛙が澤山寄つて来る。だん／＼近づくに從つて、其の光に眼が眩んでウロ／＼してゐるのを手捕へにする。

斯くして捕へられたのは袋に容れられて、蛙を割く仕事場に送られる。其處で卓子の上に並べられると、婦人達が袖短かに捲り上げ、右手には庖刀を持ち、左手で蛙を抑へ、丁度日本の鰻屋で鰻を裂くやうにして、其蛙を

二つに割き、皮を剥いで體裁よく鐵の小串に挿し、氷詰にした儘籠に入れて汽車でパリに送り出すと云ふ順序である。

數週間に二萬疋の蛙を料理す

次にパリーの料理店では其の串に挿した蛙を如何するか。先づ其の値段は上等の食用蛙は一串四フラン（一フランは我國の約四十錢に當る）から五フラン位である。之れを料理するには或は汁に煮たり、或はバターで揚げたり、或は又オムレツにしたり、其他いろいろの變つた方法があつて食物道樂の人達の間では最も粹な御馳走として珍重されて居る。パリーの郊外のフレヌヌと云ふ所は監獄署があるので有名であるが、それと共に蛙料理の名所である。蛙の味の最も佳いのは復活祭の前後三四週間であるが、此の季節になると四方八方から自動車や汽車や馬車や

に乗つて大勢の食道樂の人が集る。其所に料理屋の大きいのが二軒あるが、此の季節の數週間に二萬疋以上の蛙を料理すると云ふ事である。どうも素晴らしいものではないか。

「斯う云ふ話を聞くと、太郎、お前も一串食べて見たい事はないか。食べたいと？さうだらう私も實は食べて見たいやうな氣がする。ハ、ハ、ハ」と叔父さんは快活に笑つた。

「珍味の話が出たから、もう一つ之も矢張り佛蘭西人が喜んで食べる奇抜な料理の話をしてしよう。夫れは蝸牛だ！」

蝸牛の料理は珍味中の珍味

垣根や庭樹に這つて居るの丈では不足

垣根や庭樹に這つて居る丈では不足

日本でも東北の或る地方では蝸牛を薬として食べるさうだが、佛蘭西では薬として食べると云ふやうな手鈍い事ではない。頗る甘味い御馳走としてドシ〜食べる。それ故唯だ垣根や庭樹に這つて居るもの丈では足りないので、之れを飼つて殖す畑が出来て居る。

蝸牛の養殖場は、オートブールゴニユとかジユラとか云ふやうな地方に在るが、其の場内には地面から一寸五六分位の高さの杭木を打ち、網で其の周囲を取圍んで置く。其の又外廓に添うて甘藍、萬苳の類を栽培り、葡萄の葉を小さく束ねたのを彼方此方に散らして置くのである。又此の圍ひの内には石片で掩ふた柴の小舎が造つてある。之れが蝸牛養殖場の大體の模様であるが、尙ほ此所では滋養物の多い食物を與へ、香氣の高い植物を所々に撒いて置いて、蝸牛にも香を付けるやうにするのだ。上等の蝸牛は三四年もかゝらねば出来ないうであるが、蝸牛養殖場で

は二百メートル平方の處で約一萬の蝸牛が飼はれ、而して蝸牛は毎年六十以内の子を産むと云ふ。繁殖が餘り早い方でなく、且つ之れを仕立てるには中々手数と年月とを要するから、値段も従つて高い。

一年八十萬足の蝸牛を食べる

毎年霜の降り出す十月頃になると、蝸牛は冬籠の用意を始める。先づ深く地中に潜り込むのであるが、其の際には自分の體軀より七八十倍も大きな石でも動かして其の下へ入り込むのである。斯くて安全の場所に落着くと、其の殻の中へ柔かな體軀をスツカリ縮め込んで、内部から硬い膜を分泌して入口を塞いで了ふ。蝸牛を捕獲するのは此の季節である。捕獲の季節になると、婦人の一團は、手手に鐵で製造へた道具を持つて蝸牛養殖場の土を掻き分けて、穴の中に冬籠したのを掘出して拾ひ集め

るのだ。
 拾ひ集めたのは、鹽水を沸した鍋の中へ、ゾロ／＼と澤山抛り込み、廿分間ばかり茹でた後、之れを掻き上げ小さい鈎で外殻から肉を離し、其の肉を採按器(此の道具は人の手か或は器械の力で動かすやうになつてゐる圓筒形のもので肉を揉んで柔かくする)に入れ柔かくなつたのを取出して、バタを入れ蒜や葱と一緒に味をつけた肉饅頭に造り上げ更に新しい貝殻の中へ填めるのである。之れを食べる時には、暖めて箸を入れるのだ。そんな大仕掛けな事をしなくても、丁度日本の蠔の壺焼でも製へるやうに、先づ茹で、肉と殻とを離し、肉は肉切俎で軟かくし、簡単に調理する事も出来るのである。處で、佛蘭西では一年六十萬から多い年には八十万食べる。或る好事者の計算したところに據れば、其莫大の蝸牛の殻を一列に並べると、パリーの都から露西亞の都聖彼得堡まで達するさうである。

ある。
 さて、蝸牛の相場は生で百箇が三フラン(一フランは四十錢許)味をつけたのは百箇六フラン位である。此の蝸牛肉をパリーの食道樂達が食べるやうになつたのは、或る葡萄酒商人がブルゴーニュ地方に出かけた時、田舎の旅舎で御馳走になつたのが抑々初である。其の商人は初めて食べた蝸牛の肉の意外に甘味いのに感心し、パリーへ出て此事を吹聴した。すると各料理店で試みにやつて見ると、非常に好評を博したので、それが今日に及び益々需用を増して行くといふ事である。

雌雄の別なく卵を産む

蝸牛と云へば、日本でも梅雨の頃よく垣根などを這ひまはつてゐる動物で、子供達は之れを捕へて蝸牛角出せ槍出せ。などと云つて遊ぶ極あり

垣根や庭樹に這つて居る丈では不足

ふれた動物である。
 これは鳥賊章魚法螺貝文蛤等と同じく軟體動物である。骨がなくて全體が柔かであるが硬い介殻を分泌して其の中に入つてゐる。
 這ふ時には介殻の内から柔軟かな體を出して、介殻を負うたまゝソロソロと歩む。腹面は足で平かである。
 頭部には二對の角のやうなものがある。短かい一對は觸角で下に附いてゐる。之れで探りく匍匐のである。又其上に付いた一對は長く、其の先が小さい球状になつてゐる。之れは眼である。口内には角質の顎と齒舌とがあつて匍ひなから食物を舐める。
 雌雄の別なく皆卵を産むのである。斯う云ふ動物を雌雄同體の動物と云つてゐる。

『今日は少し汚らしいお話をしよう。』
 叔父さんに斯う云はれて、太郎は聞かぬ前から何だか氣味が悪いやうな變な氣持がしたが、然し一體どんな話だらうか早く聞いて見たいとも思ふのであつた。

尾長蛆の生立と蠅蛆の旅

小春日和に飛ぶ優しい花虻

十一月から十二月央にかけての天氣の好い日所謂小春日和に、日當の好い植物の葉や秋草の花の上などをブンブン微かな翅音を立てながら飛びまはつて居る蠅に似た蟲がある。よく見ると、あの夏分臺所やお座敷を翔ちまはる蠅とは少し異つて居る。長さは大抵五分位體の色は茶褐

色で腹には黒い横條があり且つ腹の端は全く黒く翅は透明な薄褐色で其の前縁の處に黒い紋が付いて居る。之れは花蛇と云ふ昆蟲である。見たところ、優しい動物で、餘り美しくはないけれども決して醜い事もない。汚らしい事など尙更無いのである。けれども其のお里を尋ねて行くと少々鼻摘みである。否、少々では駄目だ、いづか、鼻をつまんで居ないと、臭くて堪らぬ所なのである。

では一體其のお里と云ふのは何所であるか。雪隠の壺が即ち花蛇のお里である。この壺の中に這つたり泳いだりしてゐる彼の尻尾の長い蛆が花蛇の幼少い時の姿なのである。一寸信じられないやうな話ではないか。

どう云ふ順序で蛆から蛇に變るか

併し、尾長蛆が後に花蛇となる事は眞實である。それならばどう云ふ順序で蛆から蛇に體が變つて行くか。先づ蛆を一つ取上げて見よう。

體の長さは六七分、十二の節から出来て居る。頭の先には短い角のやうなもの、二本ある。又體には澤山の横皺があるし左右の兩脇に太い皺が縦に附いて居る。其の腹には幾對かの疣のやうなものが出て居る。之れは肢の代をして居るものであらう。體の後の端には細長い尾のやうなものが附いて居る。大層長い尾で體の長さの二倍位ある。之れは軟かな細い管から出来て居て其の附根には稍々太い鞘があつて、其の軟かな細長い管を此の鞘の中へ自由に入れる事が出来る。

處で、此の細長い管の尾のやうなものは、實は尾ではない。呼吸をする爲に空氣を吸入する管である。丁度我々が口や鼻の孔で呼吸するやうに尾長蛆は此の管で呼吸するのである。

此の蛆は前にも云つたやうに糞汁の中に泳いで居るから、若し體に呼吸の器官が附いて居たならば非常に不便である。處が尾のやうな管の先で空気を呼吸する事が出来るから體は糞汁の中に居ても唯だ管の先を一寸表面に出せば可いのである。面白い仕掛ではないか。

十分成長すると壺から這出す

長尾蛆は一方口からは糞汁を吸ひ、一方管の先からは空気を吸ひ、漸々成長してもう十分大きくなつた時、ソロ／＼糞壺の中から上つて、地上をゴロ／＼轉げるやうな風をして這ひまはる。そのうち適當な處を見つけて土の中へ潜り込む。尤も眼も何にもないから別に適當な處を見分ける譯ではないが、唯だ的もなく這ひ歩く間に自然と適當な處に落ち付くのである。

さて土の中に入ると體は縮んで椎の實のやうな形に變じ、皮は稍々硬くなり灰褐色を呈し、また尾のやうな管も短くなり、少し曲つて硬くなる。此の形は蠶で云ふと蛹に當るものである。而して此蛹が土の中で一二月暮らすと、中から綺麗な花虻が出る。之れが日春日和の草葉や花の上を飛びまはるのである。暫くすると又此の花虻が便所などへ行つて卵を糞壺の周圍に産みつける。それが翌年の夏になると、孵つて小さな蛆となるのだ。最後に一言附加へて置き度いのは、此の花虻は其の形から彩色まで非常によく蜂に似て居るので、小鳥などは蜂だと思つて滅多に啄つて食べない。花虻の方でも恐ろしい敵の前を平氣でブン／＼飛びまはつて居る。之れは即ち前掲の『保護色』の處で話した擬態の例である。花虻は自分の姿を刺鍼と毒を有つた蜂に似せて、他の動物から攻撃されないようにし

て居るのである。

何千何萬の蛆がゾロ／＼と流れ廻る

『蛆の話が出たから、序に蠅の蛆に就てもう少し話さう。』
夏分食物を少し長く貯へて置いたり、路傍へ鳥や獸の死骸を棄て、置いたりすると、其の中から白い蛆が澤山出て来る。之は蠅の幼蟲なのである。初め腐敗したものに蠅が卵を産みつけると、それが孵つて蛆となるのである。此の蛆は食物を十分取つて了ふと前の尾長蛆と同じやうに多くは土の中へ潜り込んで蛹となるから、何時迄も其の腐敗した食物や死骸の中にじつとしてゐない。聽てゾロ／＼と這ひ出すのだ。
一疋や二疋ならば餘り口立たぬが、時には何千萬匹と云ふ莫大な蛆がゾロ／＼と一つの流れとなつて方々を旅行する事がある。日本では餘り

見かけぬが北歐羅巴や亞米利加ではよく此の蛆の旅行を見る事がある
そうだ。

此の旅行團體は長さが普通三丈位であるが、時には十丈にも達するやうな大團體がある。而して其の中は五六寸厚さは一寸位であるから、少し遠方から此の旅行團を望むと一筋の白布を引いやうでもあり、米の研汁を流すやうであるとも云ふ。

何しろ眼も鼻もない蛆の旅行であるから、何所へ行くと云ふやうな目的のあらう筈はない。道であらうが草原であらうが砂地であらうが、そんな事には一向頓着せず、ニヨロ／＼ゾロ／＼とのたくりまはる。其のうち、どうかすると列の先の方と後の方とが附着いて輪のやうな形となり何時迄も同じ處をグル／＼廻つて居る事がある。又時には他の旅行隊と合併して、非常に大きな團體となる事もある。

一體何の爲の旅行であらうかと云ふに、食物が足りなくなつた爲、方々探しまはるのだとの事である。或は又蛹となる爲に適當の籠り場所を探して歩くのかも知れぬ。兎に角後には蛹となり更に姿を變へて蠅となる事は事實であるが、其の旅行の目的に就ては未だ十分に研究されて居ないさうである。

『動物界の事情を調べて見ると、人間社會の有様によく似た事が幾らもある。譬へば人間社會に、自ら獨立する事が出来ないで他人の家の食客をして居る者があるやうに、動物の中にもコツソリ他の動物の體內へ入り込んで其の食物を盗み取る不都合な動物がある。『居候三杯目にはそつと出し』と云ふ川柳もある通り、人間の居候は多少遠慮するけれども、動物の居候と來ては遠慮會釋はないから實に厄

介だ。』と云ふのを冒頭にして叔父さんは動物の居候即ち寄生蟲の説明をした。

無遠慮な居候動物

丈夫な膜に捲はれた條蟲の卵

『牛肉の生煮を食べると條蟲が生く。』とはよく聞く事であるが、どう云ふ譯で牛肉の生煮から條蟲が入り込むか。一體此の條蟲は人間の腸の中に棲む動物で誰れも知つて居るやうに、丁度眞田紐の様な扁平い形をした非常に長い蟲である。而して其の體は澤山の片節から成立つて居るが、其の片節には多數の卵が入て居る。條蟲が十分成長すると、其の節々が尻の方から次第に分離れて人の體の外

へ糞と一緒に出る。其の片節に入居る無数の卵は一つ宛丈夫な膜に被はれて居るので、人體の外へ出ても容易に死なない。或は雨水の爲に流されたり、或は砂塵に混つて所々方々へ運ばれたりする、而して水中に落ちたものは其被膜を脱ぎ水中を游泳するのである、暫く水中を游泳した後には草の葉などに附着して休で居る、此時に牛や豚杯が此の草を喰ふと其胃の中に入つて胃や腸の壁を突き破つて血管の中に潜り込み、更に筋肉の中に入つてから、そこで囊のやうな形となり吸盤をもつた頭が出る。そして何時までも其儘の形で寄生主の體の中に居るが、一旦其の肉を人が食べると、直ぐ其の頭に在る吸盤で腸に吸ひつき囊のやうな處は無くなつて、其の代に幾つもく片節が出来て長く生長するのである。

人間のお腹だけでは成長し得ない

前に述べたやうに、條蟲は人間のお腹だけでは成長しない。卵が一旦出て孵化して牛や豚や鮮などの骨に入つて其處で囊蟲となつたものが、人間の腸に入つて来て成蟲となるのである。だから若し人が囊蟲の寄生して居る牛や豚などの肉を食べなかつたならば、條蟲に取りつかれる心配はない。併し、それ等の肉を食べない譯には行かぬから、よく煮て其肉の中に居る條蟲の囊蟲を殺してから食べる事が肝腎である。條蟲の頭は圓い棒の先のやうで吸盤を有つてゐる。此の吸盤は條蟲の種類によつて違つて居る。即ち鮭から來るものは長方形の吸盤が二つある。牛や豚から來るものは圓形の吸盤が四つも付いて居る。殊に豚から來るのには吸盤の外に鈎までもついて居る。随分念入りの道具をもつて居るが、豚から來る條蟲は西洋に多く日本には殆んどないさうである。

頭の次には細長い部分がある而して其れからだんく扁平い片節が幾つも出来て真田紐のやうな形となるのである。さて此の片節の部分は幾ら切り離されても頭さへ残つて居れば直ぐに又成長する。其頭は今も云つたやうに吸盤や鈎で念入に吸ひ付いて居るから容易に離れない。實に厄介な動物である。

それから條蟲の卵であるが之れは餘程運のよいのでないと牛や豚の體に入り更に人の胃腸に入つて成長する事は出来ぬ。人間の腸から出た卵が再び人間の腸に歸るまでの徑路は實に危い綱渡りのやうなもので、首尾よく成功するのは殆んど僥倖と云つても可い位だ。けれども何しろ條蟲の卵の數は莫大なものであるし、又其卵は非常に堅固で暑さにも寒さにもよく堪へる膜をかぶつて居るので、死ぬ奴も随分多いが巧に人間の腸に忍び込み、無遠慮に滋養分を盗む奴も亦少くないのだ。

二週間で寄生主を斃す居候

寄生蟲にもいろいろの種類がある。子供のお腹によく寄生する蛔蟲を初め牛や羊の肝臓に寄生する肝蛭、人類の肝臓に寄生する肝臓ぢいとまなども皆寄生蟲である。

冬から春の初め頃桑畑を歩いて居ると時々桑の木に真黒くなつて垂下つて居る尺蠖を見る事がある。尙ほよく注意して見ると、其の體軀の所々が膨れ上り、時には小さい孔が穿られて居る。之れはカモドキ蜂と云ふ小さい一種の蜂の爲に卵を産み付けられたからである。此のカモドキ蜂は體の長さ二分許りで黒褐色を帯びて居るが尺蠖の體に止り二三十分間かゝつて三四十粒の卵を尺蠖の皮膚の下へ産みつける。すゝると間もなく其の卵が孵化つて幼蟲となり尺蠖の肉を食べて成長する

ので、其の尺蠖は漸々衰弱して、卵を産み込まれてから二週間許も経てば黒色になつて死んで了ふ。之れはカモドキ蜂の幼蟲が尺蠖の体内に寄生したのである。寄生蟲の害も斯うなると、随分手酷しく残酷なやうである。が、一體此の尺蠖は人間が折角苦心して栽培つた桑の葉を食べて了ふので、非常な損害を與へるものであるから、カモドキ蜂の爲に酷い目に逢ふのも悪行の應報で仕方がない。而して先刻黒くなつて死んだ尺蠖の死骸に小さい穴があると云つたが、之れは蜂の幼蟲が成長して一旦蛹となり、それから蜂となつて飛び出した痕なのである。

『寄生動物も動物の居候に就ては、まだ面白い話があるから、題を改めてもつと話さう。』と云つて叔父さんは一服した。

不精な動物と横着な動物

なまけて居るとデクの坊になる

『自分は餘り働かなくともお父様やお母様があるから、呑氣に遊んで居て食へる。』

こんな事を云つて毎日ノラクラと遊びまはつて居る者が人間社會に澤山居る。

丁度之れと同じやうに、動物社會にも自分は餘り働かないで、他の動物を待みにして暮して居るものが随分多い。前に話した寄生動物も其の例であるが、彼等は懐惰てばかり居て身體を使ふ事が少いから、だんく身體の構造や器官が退化して役に立たなくなる。眼が利かなくなつたり、

鼻が馬鹿になつたり、一部分だけ退化したのもあれば、中にはまるで木偶の坊のやうになつて、動物だか植物だか分らぬやうなものも少なくない。人間は衣食住に満足すると懶惰け出す。なまけて居ると身體も精神も進歩しない。懶惰な事が代々重ると遂には退化し出すのである。大洋で天下敵無しと威張つて居た鯨は、眼耳鼻等を使ふ必要がないので、唯だブラ／＼と遊び暮して居たから、今日では夫れ等の器官が退化した。處が突然人間と云ふ大敵が現はれてドン／＼大砲を撃ちつけるので、鯨先生少からず面喰つて居る。之れも懶惰けた罰だと思つて諦めるより外はない。

魚にはよく魚虱と云ふ船蟲のやうなものが喰ひ付いて居る。魚虱の肢は非常に短くて且つ爪が鈎のやうに變つて居る。之れは要するに魚の皮膚にシツカリ附着くには都合が可いけれども、水を泳ぐには不便である。此の蟲は自分で自由に泳いで生活する事を怠けたから、肢が退化して了つた。人間も自分の足では歩かないで、乗物に許り乗つて出かける者は、幾らか足が退化するに相違ない。魚虱は兎に角魚の體にさへ附着いて居れば生活が出来ると云ふ氣樂な身分である。而して彼は時々其の宿主を取りかへて見たりなどする。なまけ者だが中々面白い蟲である。

人間ならば殺人強盜の兇賊

海水浴などに行つて濱邊を散歩した人は誰れでも知つて居る、あのヤドカリと云ふ蟲も随分横着な奴である。螺のやうな貝殻の中に入つて居る。貝の内には蝦に似た蟲がある。之れがヤドカリの本體である。此の蝦に似た蟲が空の貝殻の中に宿借を

して居るのだと思つてヤドカリと云ふ名前をつけたのだらうが、實は宿を借り受けたのではなく、貝の肉を食べて了つて其の殻を奪ひ取つたのである。人間で云ふと差當り殺人強盜犯と云ふ恐ろしい兇賊である。此のヤドカリを取上げて、貝殻の尻尾の方を灸つてやると、奴さん熱いのでノソノソと這ひ出す。這出したのをよく見ると頭の方丈は始終外に覗いて居るから硬いけれども、貝の内に入つてゐる部分はフワフワして居る。然し此の蟲もまだ他の貝を奪ひ取らぬ以前は全身に硬い皮を被つて居たのであるが、一旦堅固な棲家を見出すと共に、餘り樂をして居たので遂に體が退化したのである。即ち蝦は十本の肢で歩くが、此のヤドカリは前の方の肢六本丈が役に立つけれども、後の方の四本は小さく長縮けて了つて居る。

眞にお恥かしい姿となつた

上には上があり、下には下のあるもので、茲にヤドカリの腹に宿を借りて居る蟲がある。「又ヤドカリ」とも云ふべき奴であるが、形は細長い囊のやうで、色はヤドカリの腹の色と同じい。だから一寸見るとヤドカリの腹の一部分かとも思はれる。此の性情者も矢張り蝦類であるが、なまけて居たので體が退化して囊のやうになつたのである。

横着者の中には、まだ面白いものが幾らもある。蟹の腹側には横に線の入つた扁い所俗に蟹の禪と云つて居るがある。卵を産む頃には此所に澤山の卵が抱かれて居る。處が其の卵の代に圓い囊のやうなものが附いて居る事がある。之れは囊蝦と云ふ動物で木の根のやうなものを蟹の體内に入れて、シツカリと自分の體を附着けて

居る許りでなく、其の根のやうなもので、蟹の体内から滋養分を吸つて生活して居るのだ。

蟹こそ可い迷惑であるが、囊蝦は斯くして自分は少しも働かないで生きて居る。實にお話にならない横着者ではないか。此の横着者は蟹の腹の裏に居るのだから住所も敵に侵される心配の無い所で食物は今話したやうに勞せずして得られるので、體を働かす必要がない。そこで漸々退化して遂に囊のやうな眞にお恥かしい姿となつて了つたのである。けれども其の囊の中から産み出された卵は、水の中で孵化ると蝦の幼蟲のやうに肢もあれば口もあり、活潑に水中を游泳して居る。それが應て蟹の腹の處へ喰付き、前に云つた如く囊のやうになつて了ふのである。

不精して頭まで無くなつたホヤ

「人間社會にも横着者が澤山居て困るが、動物界にも随分種々の横着者が居る。そこでもう少し此の話を續けよう。」と叔父さんは更に話の穂をついだ。

餘りなまけてばかり居たので頭が無くなつた動物がある。ホヤは此の例である。

ホヤは海底の岩石や植物などに附着して居て、まるで動かないし、其の形も亦外部から見た處では動物とは思はれぬ。

體の全體が細長い囊のやうな形で、其の下部の方で他物に附着して居る。上の方は二つに岐れて其の頂きには各圓い穴があいて居る。氣をつけて此の穴を見て居ると、一方の穴からは水が出るし、一方の穴からは水が流れ込む。それ丈だから、木偶の坊のやうな動物である。一寸見れば動物か植物か見分がつかぬ。

が、其の體を解剖して見ると、心臟もあれば胃も腸もある。又神經球もチヤンと備はつて居るし、卵も有つて居る。確に動物である。殊に其の卵から出て来た子供は蛙の蝌斗によく似て居て、頭には目もあるし立派な尾もあり、體の中軸には脊索もあつて、水中を自由に運動する。疑ひもなく脊椎動物に近いものであるが、暫くすると吸盤で他の物に吸ひ付く。蛙の蝌斗は一旦吸ひ付いても直ぐ又離すけれども、ホヤの子は吸ひ付いたが最後離さない。それから成長するに従つて體に變化が起り、先づ尾が消える、神經や感覺器官が小さくなる。殊にその感覺器の方は最後にまるで無くなつて了ふ。神經も腦と思はれる極僅かな部分に残るだけである。頭もなければ手足もなく、意氣地のない姿となるのだ。之れも要するに不精で働かなかつたからである。吾々の手足や筋肉もよく運動させないとホヤの體のやうになる。頭腦もよく使はないとホ

ヤのやうに頭が何所にあるのか分らないやうな妙チキリンなものになるのだ。今日吾々が萬物の靈長であると威張つて居るのは、吾々の祖先がホヤのやうに不精をしなかつたからである。

風や潮流を利用して敵を選ける妙案

河豚も亦中々づるい動物である。浮游して居る時敵が来たならば、腹の内をうんと空氣を入れて太鼓のやうに腹を張らせてグラツと顛覆つて腹の處が水の上に出る。そして風や潮流に流される。自分で體を働かせないで風とか潮流とかを利用して敵から遠ざかる。之れは懶惰者と云ふよりも狡猾と云ふ方である。然し何にしても面白いではないか。コバンイタダキと云ふ魚は、頭の上に小判のやうな形のものがあつて之れを以て鮫だの鯨だのと云ふ大なる動物の體に吸ひ附いて何十里何百里

とても自分獨りでは行けさうもないやうな遠い所へも行く事が出来るのだ。之れも随分狡猾い魚である。而して此の魚は始終他の魚の體に附着いて居るのでなく、時々離れて食物を取り又急いで附着くのである。之れは成るべく自分の體を動かすまいと考へた動物である。人間にもよく斯う云ふのがゐる。親から生み付けて貰つた立派な手足五體を持つてゐながら、兎角不精をやる、手足を動かさないで生活しようと思へる。甚だ不心得な事である。

太郎は或日小川へ遊びに行つて蟹を捕つて歸つた。

「其の蟹は雄か雌か。お前分るか？」と叔父さんに尋ねられたけれど

も、太郎は夫れを見分ける法を知らなかつた。

面白い蟹と恐ろしい蟹

蟹の雌雄は如何して見分けるか

蟹には尾がないが、其の尾となるべき部分は腹の方へ曲つて、俗に云ふ禿になつたのである。此の禿の幅の狭いのが雄で、廣く圓みを帯びたのが雌である。體は雌の方が雄よりも大きいけれども雄の缺は特別に非常に大きい。先づ此の三つの點から容易に雄と雌との區別は出来るのである。さて蟹の中にも種々面白いものがあるから、變つたもの二三種に就て話して見よう。

大きな河口などに棲で居る小蟹で潮招き一名田打蟹と云ふのがある。

此の蟹は濱邊の細い砂を掻き集めて口に入れ、砂の中から滋養分だけを食つて砂は吐き出してふ。澤山寄り集つて、海濱の砂の中へ穴を掘つて棲んで居るがその穴から出て盛んに餌をあさつて居る處を靜かに見て居ると中々面白いものである。

先づ其の附近には砂の小團子が澤山散ばつて居る、而して其の傍の砂の上には蟹の爪の跡が一面について居る。蟹はどうするかとよく見て居ると、その鋏を上げて物を招くやうに幾度もく上下し、左の方の爪では盛んに小砂を掻き上げて口の中に運び、そして再び其砂を吐き出す。

奇妙な音を立てる田打蟹

次に此の田打蟹に就て面白いのは、其の鋏には一つの不思議な仕掛があつて、ガリ／＼ガリ／＼と云ふ一種の音響を出す事である。此の仕掛は

一體何の爲に使ふか。

此の蟹が穴から出て、一生懸命に例の砂の團子を拵らへて居る時突然人の音響がするとか、其他の動物が來るとかすれば慌て、穴へ駆け込む。それが餘り慌てると他の蟹の穴に這込む事がある。すると既に其の中に居る主人公の蟹は大に立腹してガリ／＼ガリ／＼と鋏をならして、周章者を追拂ふのである。

其所で、此の鋏の音響を出す仕掛を調べて見ると、先づ鋏の内側の蝶番の直下に細長いギザ／＼の付いた部分がある。而して鋏の附根には縦に突出たところがある。音を立てる時には、鋏を内側へ折り曲げて、ギザ／＼の處と突出た處とを激しく擦り合せる、すると例のガリ／＼と云ふ音が出るのである。

椰子の木に登つて其實を採る蟹

琉球諸島や熱帯地方にはマツカン蟹と云ふ悍猛な蟹が居る。此の蟹の缺は非常に強大で、椰子の實のやうな堅い皮でも破つて其の中の肉を食べる。又埋めてある土人の死骸を掘出して食べる事がある。此の缺で挟まれると大變な傷を負ふので、土人は之れを恐しがつて居ると云ふ。又此蟹は樹登をする。夜になると穴からゾロ／＼這ひ出して椰子樹や其他の果物の樹にスル／＼と登る。食物は夫等の樹の果物や仲間のもの、死骸などである。時には壁のやうな眞直な断崖でも巧みに上るさうだ。面白いのは此の蟹が椰子の實を其の穴に運搬する有様である。第一には椰子の實の堅い皮を剝ぐ。そして實ばかりを足の下の方に抱へ込んで人が爪先で歩く時のやうな風に、體を高く持上げて運んで行く。

又此蟹には奇妙な性質があつて、皿だの瓶だの布片だの何でも彼でも突當つたものは皆な穴へ運搬する。餘程慾の皮の厚い蟹と見える。又其の甲殻に藻草や海綿などをつけて居る蟹もある。之れは例の保護色と同じ理由で、磯邊の岩石などと同じやうな形と色とをして敵の目を避ける事が出来るのである。

人間は非常に精巧な武器を幾つも有つて居る。動物にも武器を有つたものはあるが、到底人間の武器とは比べものにならぬ。百獸の王と云はるゝ獅子でさへ武器としては牙と爪としか有つて居ないぢやないか。併し動物の中には大層面白い武器をもつたものがある。斯う云つて叔父さんは鼯鼠の話をした。

最後尻をヒツて敵を凹ます鼯鼠

奇抜なる墨汁や臭氣の武器

鳥賊や章魚が敵に出逢すと、墨汁を吹き出して周囲の水を黒くし、敵の眼を晦して置いて逃げると云ふ事は誰れも知つて居る話である。之れと同じやうに鼯鼠は敵に襲はれて窮した時には、何とも云はれぬ程厭な臭氣を出して、敵を凹まして置いて其隙に逃げる。之れは俗に鼯鼠の最後尻と云ふものだが、實は尻ではなくて肛門の傍にある腺に貯へた悪臭なる液を分泌するのである。鳥賊や章魚の墨汁も鼯鼠の此の臭氣も一種の武器である。角や牙は平凡であるが、武器も墨汁や臭氣になると奇抜で面白い。

鼯鼠は赤褐色の光輝のある毛の生えた長さ一尺許の獸である。常に農家の附近に棲んでゐて鼠や鶏などを捕つて食べる。お米を引いたりペストの毒を持つて來たりする鼠を捕つて呉れるのは嬉しいが、鶏や雛や小家鴨を捕るので家禽を飼ふ者からは大變嫌はれる。殊に我々が憎らしく思ふのは、池の鯉や金魚を引ずり上げて食べる事である。

頭か頸に咬み付いて血を啜る

鼯鼠が大鼠を捕る時には必らず後から攻撃する。さもないと、鼠は長い鋭い齒を以て咬み付くから、甚だ此方が不利益である。「窮鼠却て猫を咬む。」と云ふ言葉もある通り、鼠は中々強い動物で、まさかの時には猫にでも咬みついて抵抗するのである。鼯鼠に取つても餘程の大敵でウツカリすると其の齧のやうな齒にかゝつて非常な傷を受ける事がある。

最後尻をヒツて敵を凹ます鼯鼠

で、鼯鼠は先づ鼠の後から飛び蒐つて其の頸か頭に咬み附いて血を啜る、そして敵手が死ぬまで放さない。其時鼯鼠の前肢はシツカリと敵の體を抱いて動かさせないやうにして居るのだ。此の動物は性質が大膽で且つ殺生を好み時には食餌にするのでもないのに、唯だ殺す癖がある。だから鳥籠の中などへ闖入んで中の鳥を一羽も残さず殺す事等が往々ある。

獨りて叶はぬ仲間を驅集めて来る

或る地方では鼯鼠が澤山群集して棲んでゐて、附近を通る人に向つて咬みかゝるので大層恐がられたと云ふ話がある。非常に怒りツポい動物で少し氣に逆らつても直ぐ向つて来る。殊に其の子供に危害を加へる者がある時は突き進んで来て之れを防ぎ、若し自分獨で敵ぬと見ると、同

類を驅り集めて、大舉して突撃する。

又敵を追拂ふ爲でなく、餌食にする動物を狩る爲に、大勢一緒に進んで来る事も度々ある。或人が山の中を歩いて居ると一列になつて進むのを見たら鼯鼠であつた。而して之れは他の動物の臭氣を嗅いで追撃して行くところだつたのだと云ふ。

年々に二回若くは三回幼兒を産む。そして一度に三四頭宛出来る。雪が久しく積つて居る處では、其の毛が冬期だけ白く抜けかはるものがある。ゑぞいたちは其一例である、又西比利亞や北歐羅巴には、始終白色をした鼯鼠が居る。

『叔父さん、蜘蛛が巢を張つてるから出て御覽なさい。』

夏の夕方、花子は斯う云つて書齋に居た叔父さんを引張り出した。成程物置小舎と土蔵との間へ大きな蜘蛛が一生懸命で網を張るところである。其の技術の巧妙な事には如何に熟練した人間の技師も叶はぬ。蜘蛛は動物中の美術家である。

蜘蛛は動物界の美術家

蜘蛛に對して感謝すべき二つの事

蜘蛛は昔から人に嫌はれる。支那の王守乙と云ふ人は洛陽の都で藥賣りをしてゐたが、蜘蛛の巢を見ると必ず杖で破り棄てた。「何故そんなに蜘蛛を嫌ふのか。」と問はれて「天地間に生きとし生ける者は口と腹との爲に空を翔け地を走り勞苦するのみに、獨り蜘蛛のみは巧に網を張り居な

がら物の命を害する、自分は此の點を憎むのだ。」と答へたさうである。併し、それは甚だ所以ない事である。成程蜘蛛は巧みに網を張つて小さな動物を捕つて食べる。けれども人間はどうであるかと云ふに、網や釣は勿論の事、鐵砲や爆裂彈や毒藥などを以て、ドシ／＼生物の命を奪ふではないか。それを思へば蜘蛛の網位何でもない譯である。

吾々は蜘蛛の所爲を憎むよりも、寧ろ蜘蛛に對して感謝せねばならぬ事があるのだ。

第一に、蜘蛛は我々の家の内外に網を張つて蠅や蚊を引つかけて呉れるので、之等の害を少くする事は莫大なものである。

第二は、其の糸は細くして強く、且つ其の太さが一定して居て著しい變化がない。此の點に於ては、如何に科學の發達した今日でも人間は到底蜘蛛に及ばないのである。現に測量器械とか望遠鏡とか其他物理の實驗

などには盛んに此の蜘蛛の糸を使用つてゐる。

蜘蛛の糸に就てのいろいろの研究

其の糸の丈夫な事は前年垣根の木の間にかけてた蜘蛛の糸が長い冬中雨や雪に曝されたにも拘はらず依然として今年も残つて居るのを見ても分るのだ。

外國では此糸を縫物に使用つて居る處があるさうである。又伊太利西班牙佛蘭西亞米利加等の學者は度々之れを研究して實際の用に立てやうとした。既に伊太利の或人は此の糸で手袋を編んだと云ふ事である。又嘗て佛蘭西の政府では委員を任命して蜘蛛を人間が飼養する方法を研究させた事がある。併し其の結果は餘り面白くなかつたやうだ。と云ふのは蜘蛛は天性獨りで暮す事の好きな動物で決して蠶のやうに

澤山寄り合うては長く居ない。彼等の同じ巢に大勢居るのは唯だ幼少い子蜘蛛を育て上げる間雌蜘蛛が之れについて居るばかりで暫くすると子蜘蛛も散りくばらくになつて了つて雌蜘蛛は又一人残る。夫婦一緒に居るのは極僅の間で雄の蜘蛛でもウツカリすると雌に食べられて了ふのである。

雄蜘蛛の體は非常に小さい

雄の蜘蛛は雌に比べるとお話にならぬほど小さい。まるで種類が異なるのではないかと思はれるほどであるが其の哀れな雄蜘蛛は巢の一隅に小さくなつて雌の怒にふれないやうにしてゐる。

夫婦の仲でさへその通りであるから到底之れを多數一緒に居らせる事は思ひも寄らぬ。それさへ出来れば非常に強い立派な蜘蛛の糸が取れ

て、世界の織物界に大變動を起させる事が出来るのに、惜しい事である。捕鳥蜘蛛は蜘蛛の中で最も大きいもので、體の長さが二三寸に達する。形は蠅取蜘蛛のやうであるが、全身に澤山の毛が生えて居る。性質猛悪で、時には小鳥を捕つて食ふ。始終地上を這ひまはり、蜥蜴や昆蟲を常食として居る。普通の蜘蛛のやうに網を張らないが、其の舉動は頗る活潑で、餌を捕へる時などは、眼にも止まらぬ早術をする。又、戸閉蜘蛛と云ふのは、地面に小さい穴を掘り、入口には圓い戸を閉てゐる。常にはその戸を半分ばかり開いて、餌の近寄るのを待つてゐる。小さい昆蟲などが其の傍を通れば、突然穴から飛出して、躍りかゝる。若し又た百足のやうな大敵がやつて來た時には、ピツタリ戸を閉ちて了まふのである。ウツカリして入り込まれた時でも、其の穴には抜け道が出來てゐて、勝手

を知らぬ百足がウロ／＼してゐる間に、蜘蛛はコツンリ逃げて了ふ。中賢い動物である。

餘り小さい動物の話が長く續いたので、太郎も花子も少々飽いて來たやうだ。

「叔父さん、今度はもつと大きい動物の話をして頂戴。」
 どうも我儘な子があればあるものだと、叔父さんは眉を擡めたが、別に腹も立てず。

「成程、それも然うだ、少し單調だつた。ぢやア又獸類の話でもしよるか。處で何が可からう。動物園で見えて來た大きな動物の話は大抵済んだやうだが………ウンある／＼熊が残つて居た。」

公明正大な男らしい熊

鱒を漁る熊の早術

北海道と云へば、直ぐに熊を思ひ出す。北海道は熊の産地として有名で、此處には熊の中でも大きく且つ猛悪な熊が居る。熊は毛色は全體が黒くて顔だけ茶色なものと、全體が褐色のものとなつて北海道を初め樺太カムチャツカ等に澤山棲んで居る。性質は猛悪だけれども、他の猛獸のやうに卑怯な、狡猾な、奸悪な處がない。其の姿が無細工である如く、其の性質も無細工で正直である。その爪は如何にも猛獸らしいが、猫や虎のやうに毛で隠されて居ない。ありの儘ムキ出しである。熊はその爪の如くムキ出しの公明正大な動物である。

のだ。

四月頃雪が溶けた頃に熊は蟄居から出かける。而して草の根を掘出して盛んに食べる。又ミツバセウ、フキ、トシヤク、蜀黍なども好んで食らふ。

又秋になると果實を食べる。山葡萄、コクワ、シキミなどを採しまはる。其他蛙、鱒、サリガニなども食べ、時には兎なども捕へて食ふ。

熊が鱒を漁るのを見るのに、先づ一方が砂洲で一方が浅瀬と云ふやうな川の曲角に静かに蹲踞んで待つて居る。魚が下流から上つて來ると、電光石火の如く足の爪で掻き上げて其場でムシヤク食べる。食べる時には頭の方から骨も臍も一緒にペロリとやる。よく話に聞く處であるが、熊が魚を熊笹に突通して擔いで棲所へ歸ると云ふやうな事はどうも事實とは思はれない。

牡が仔を喰べる心配から牝は單獨で蟄居

熊は往々牛や馬を初め其他の家畜を襲ひ、稀には人を捕つて食ふ事もあ
る。北海道では山中の炭焼小屋へやつて来て人を食べた事や、牧場へ現
はれて馬や牛を斃した例は幾多もあるのだ。
處で、熊が最も盛んに野山を歩きまはつて活動するのは、春の央ば、穴から
出た當分食物を探し廻る時と、六七月頃の交尾期と、秋になつて果實が成
熟した時とである。それから間もなく冬が来て雪が二三寸も積る頃に
は、皆な穴へはいつて了ふ。
穴は大木の根元とか岩石の下とか土中の穴とか凡てさう云ふ風の天然
に出来て居る洞穴であるが、牝と牡とは別々の穴に入る。之れは多分牝
の産んだ仔熊を牡が喰べる心配があるからであらう。

而して蟄居の間は體を成るべく小さく縮めて、何にも食はず飲まずに、翌
年の四五月頃まで暮らすのである。蟄居をしてゐる穴は外から見ても
直ぐ分る。と云ふのは、呼吸をする爲に一尺位の穴が雪の上にも現はれ
て居るし、其の穴の周圍が息の爲に黄色に汚れて居るからである。
仔熊が胎の内に居るのは七ヶ月生れてから乳を飲ませる間が四五ヶ月
であるから、蟄居の間に仔を産み夫れに乳をやる譯である。だから牝の
熊は蟄居の間に非常に疲勞れる。而して生れる仔の數は普通二頭で時
には三頭の事も一頭の事もある。

熊の穴狩と追狩は如何してするか

次には熊狩の話であるが、北海道で主に行はれて居る方法が三つある。
第一は穴狩、第二は追狩、第三はアマツボ狩。

第一の穴狩と云ふのは、冬期熊が穴に居る時の方法である。先づ熊の入つて居る穴を見つけて出す。それにはまだ雪の降らぬまへ、大概熊の入りさうな穴を見つけて置いて目標をして置き、雪が積つてから行つて見ると、熊の息で穴の口が汚れて居るから直ぐ分る。蟄居の穴が分れば、附近の林で丸太を四五本伐り出し、柵を拵へて穴の入口を塞ぐのである。一體熊は足で以て物を引張る事と横に拂ひのける事とは知つて居るが、前の方へ押し出す事を知らぬから、柵を作られるとそれを掴んで無暗と引く。そのうち、今度は長い棒を差込むと、熊は又それを引張らうと思つて入口の處まで出かけて来る。其の時を見定めて鐵砲で撃ち殺すとか、槍で突き殺すとかするのである。

第二の追狩と云ふのは、春、熊が穴から出て雪の上を徘徊する足痕をついて行つて、熊を探し出して撃ち殺す方法である。先づ其の足痕の大きさに

よつて熊の年齢を知り、足痕の新しいか舊いかによつて、其處を熊が何時頃通つたかと云ふ事を知り、又其の痕の間の長短によつて、出發點であるか、或は休息に近づいて居るか、と云ふ事を知る。

その結果、追ひかけても見込があると鑑定がつけば、愈々大勢で追うて行く。だん／＼熊に近づいて、遂には熊が疲勞して熟睡して居る處などへ出逢すと、一同辨當でも食べて十分用意をしてから、熟練した獵師が眠つてゐるのを鐵砲で狙ひ撃つのである。

熊の臟腑に毒が泌み渡るアマツボ狩

第三のアマツボ狩は、春でも夏でも秋でもよい。熊が盛んに野山をかけまはる時に行ふ方法である。一種の機弩のやうなもので先づ長さ四尺位の弓に箸の太さ程の繩の弦を張り、之れに鉛筆位の太さの葦を軸とし

た矢を番へ十分弦を張つて其儘止める仕掛をし之れを熊のよく通るやうな山の中に持つて行き杭に結びつける。そして其の弓から一本の糸を出して熊の通路に當る處へ張つて置くのだ。さて矢の端には白い角とか堅い木が着けてあり其の先には鉄が箆めてある。其鉄には激しい毒がつけてある。

それを仕掛けて置くと熊が知らずに通つて丁度胸のあたりへ其の張つてある糸が引つかゝる。歩く拍子に其の糸を引くと忽ち一方に仕掛けた矢が弦を離れて熊の方へ飛んで来て熊の肋の四枚目の處へ立込む。すると鉄について居た激しい毒が臟腑にしみ渡り間もなく熊は死ぬのである。

熊を狩るにはまだいろ／＼の方法がある。其の中で面白いのは數の子攻である。之れは乾いた數の子をウント食べさせる。すると咽喉が乾

いて水を澤山に飲む。胃の中では數の子が次第に膨れて熊は居ても立つても堪らない程苦しくなる。で眼ばかりパチクリさせてゐるのを荷車にでも乗せて連れてかへるのである。此の方法は前に話した河馬狩に乾豆をウンと食はせると云ふのに似て居るではないか。

アイヌの熊の頭崇拜と熊祭

アイヌは熊の頭を切り取つて之れに裝飾をつけて祭壇に飾つて置く。熊を捕る度に其の頭だけは必ず此の祭壇に並べるので古い祭壇には熊の頭が非常に澤山飾られてある。斯う云ふ風にアイヌが熊の頭を祭るのは他の地方で狐を祭つたり蛇を祭つたりするのと等しく動物崇拜の心からである。

矢張同じ意味でアイヌは熊祭と云ふものを行ふ。祭る家では濁酒を作